

# 第3次 弘前圏域定住自立圏 共生ビジョン

## 第Ⅰ～Ⅴ章（案）

### 弘前市

令和4年3月●●日策定

赤文字：第2次共生ビジョンからの修正箇所

青文字：国勢調査の結果を基に記載している箇所、本年11月公表予定の令和2年調査結果（人口等基本集計）により、第3回懇談会までに修正予定の箇所。

※一部、令和2年調査の速報値を記載している箇所もありますが、11月に確定値が公表され次第修正します。

## 目 次

<b>第Ⅰ章 定住自立圏共生ビジョンの策定にあたって</b> . . . . .	1
1 定住自立圏の名称 . . . . .	1
2 構成市町村 . . . . .	1
3 定住自立圏構想の概要 . . . . .	1
4 共生ビジョンの趣旨・目的 . . . . .	2
5 共生ビジョンの計画期間 . . . . .	2
<b>第Ⅱ章 圏域の現状及び課題</b> . . . . .	3
1 地勢・自然 . . . . .	3
2 圏域市町村の概況 . . . . .	3
3 圏域の結びつき . . . . .	7
4 人口等の推移 . . . . .	11
5 東日本大震災、新型コロナウイルス感染症感染拡大を受けて . . . . .	14
6 生活機能 . . . . .	15
7 結びつきやネットワーク . . . . .	24
8 地域づくりを担う人材育成 . . . . .	27
<b>第Ⅲ章 圏域の将来像</b> . . . . .	28
<b>第Ⅳ章 協定に基づき推進する具体的取組</b> . . . . .	32
1 生活機能の強化に係る具体的取組 . . . . .	34
2 結びつきやネットワークの強化に係る具体的取組 . . . . .	51
3 圏域マネジメント能力の強化に係る具体的取組 . . . . .	54
<b>第Ⅴ章 共生ビジョンの推進</b> . . . . .	56
<b>資料編</b> . . . . .	58

※資料編および別冊事業費一覧表は第3回懇談会にてお示しします。

## 第 I 章 定住自立圏共生ビジョンの策定にあたって

### 1 定住自立圏の名称

弘前圏域定住自立圏

### 2 構成市町村

弘前市、黒石市、平川市、藤崎町、板柳町、大鰐町、田舎館村、西目屋村



### 3 定住自立圏構想の概要

わが国においては、少子・高齢化が急速に進行するとともに、総人口は急速に減少することが見込まれています。三大都市圏も地方圏も人口が減少するという「過密なき過疎」の時代にあって、特に地方圏においては大幅な人口減少が予想され、その将来は極めて厳しいものと予想されています。

こうした人口減少や少子・高齢化が進行する状況において、国・地方を問わず財政力の低下が懸念されており、従来のように一つの市町村が、暮らしに必要な諸機能を単独で整備することは、困難になっていくものと見込まれます。

定住自立圏構想は、中心市と周辺市町村で形成される圏域において「集約とネットワーク」の考え方にに基づき、中心市と周辺市町村が互いに連携・協力することにより、圏域全体の活性化を図ろうとするものです。「定住」のための暮らしに必要な諸機能を確保するとともに、「自立」のための経済基盤や地域の誇りを培い、魅力あふれる圏域を形成していくことを目指しています。

定住自立圏構想の推進により、地方への民間投資を促進し、内需を拡大して地域経済を活性化させ、地域の創富力を高める「地域主権型社会」に相応しい、安定した社会空間を地方圏に創り出すことが期待されています。

#### 4 共生ビジョンの趣旨・目的

定住自立圏共生ビジョンは、定住自立圏構想推進要綱（平成20年総行応第39号）及び定住自立圏形成協定に基づき、定住自立圏全体で人口定住のために必要な生活機能を確保し、自立のための経済基盤を培い、地域の活性化を図るため、中長期的な観点から弘前圏域が目指す将来像及びその実現のために必要な具体的取組等を明らかにするものです。

また、本共生ビジョンは、圏域の定住自立圏構想の取組の推進に当たり、総務省をはじめ、国の各府省の支援の根拠となる計画です。

#### 5 共生ビジョンの計画期間

本共生ビジョンの計画期間は、令和4年度から令和8年度までの5年間です。

## 第Ⅱ章 圏域の現状及び課題

### 1 地勢・自然

本圏域は、青森県西南部に位置する内陸型地域であり、その総面積は約1,598 km<sup>2</sup>で、県全体の約17%を占めています。

霊峰岩木山を西に臨み、東方には八甲田連峰を、南には秋田県境に接する世界自然遺産白神山地の山々が眺望されます。また、白神山地に源を発する県内最大流域面積の一級河川岩木川が圏域のほぼ中央部を日本海に向け北流しています。岩木川は圏域内で平川・浅瀬石川と合流して、その流域に肥沃な津軽平野を形成し、本県を代表する穀倉地帯を育んでいます。また、平野部周辺の小高い丘陵地帯には、基幹農産物であるりんごの樹園地が広がり、さらにその地域を取り巻くように山林地帯が伸び、緑豊かな自然環境に恵まれています。

### 2 圏域市町村の概況

弘前市	HIROSAKI CITY				
	行政区域面積	人口	人口密度	0~14歳人口割合	65歳以上人口割合
	524.20 km <sup>2</sup>	168,564 人	321.6 人/km <sup>2</sup>	●●%	●●%

(資料：令和2年国勢調査)

弘前市は、日本一の生産量を誇るりんごの産地であるとともに、春には日本一の桜の名所弘前公園での「さくらまつり」、夏には「ねぶたまつり」、秋には「弘前城菊と紅葉まつり」、冬には「弘前城雪燈籠まつり」と、四季を通して多くの観光客で賑わう観光都市であります。

藩政時代のたたずまいを残す寺院街や伝統的建造物、明治・大正期の洋風建築、建築家「前川國男」の近代建築などの歴史的文化的財が数多く点在しているほか、弘前駅を核とした広域的な交通拠点や宿泊・コンベンション機能、飲食街などの都市的な環境も備わっています。

また、国立大学法人弘前大学などの高等教育機関を中心とした学園都市としての性格を併せ持っており、地域を支える知的財産である高等教育機関との連携・協力を推進し、地域課題の解決に取り組んでいます。



KUROISHI CITY

行政区域面積	人口	人口密度	0~14歳人口割合	65歳以上人口割合
217.05 km <sup>2</sup>	31,972人	147.3人/km <sup>2</sup>	●●%	●●%

(資料：令和2年国勢調査)

黒石市は圏域の東部に位置し、黒石藩一万石の城下町として栄え、明治以後も南津軽郡役所の所在地として、政治・経済・文化の中心地として発展してきました。

黒石温泉郷県立自然公園などの観光資源を有し、東北縦貫自動車道黒石インターチェンジをはじめ、県土を横断する国道102号及び394号、主要地方道などの道路網を背景に、他圏域との交流拠点及び国立公園十和田湖の西の玄関口として、広域観光の中継基地の役割を担っています。

古くから「りんごと米と温泉の田園観光都市」として親しまれていますが、圏域の中心都市である弘前市の機能を補完する役割を持ち、圏域東部の中核都市として、周辺市町村を対象とした商業経済活動や、県産業技術センター農林総合研究所、同りんご研究所を中心に、農業技術集積の地として重要な役割を果たしています。



HIRAKAWA CITY

行政区域面積	人口	人口密度	0~14歳人口割合	65歳以上人口割合
346.01 km <sup>2</sup>	30,621人	88.5人/km <sup>2</sup>	●●%	●●%

(資料：令和2年国勢調査)

平川市は、圏域の南東部、秋田県との県境に位置し、自然とまちの風景が調和する景観の美しいまちです。山々に抱かれた平野部には、「平川」の恵みを受ける田園風景、それを取り巻く丘陵地帯には赤や黄色に色づくりんごの園地が広がります。

また、市内には優れた効能と豊富な湯量を誇る「温泉」が数多く点在し、県内外から多くのファンが訪れています。そして、夏の風物詩「平川ねぶた」の運行の大トリを飾る、高さ約12m、幅約9.2mを誇る「世界一の扇ねぶた」、全国でも他に例が無いと言われる和洋折衷の建物「盛美館」と、美しい大石武学流の日本庭園が融合した国指定名勝「盛美園」、これまで品評会において最高賞の農林水産大臣賞を幾度も受賞している“りんご”、果汁が多く深い甘味を持つ“津軽の桃”、そして平川市を代表するグルメ「平川サガリ」などの多くの地域資源に恵まれており、これらを活かした活性化とともに、市民が幸せで安心して生活することができるよう「あふれる笑顔 暮らし輝く 平川市」の実現を目指しています。



FUJISAKI TOWN

行政区域面積	人口	人口密度	0~14歳人口割合	65歳以上人口割合
37.29 km <sup>2</sup>	14,578人	390.9人/km <sup>2</sup>	●●%	●●%

(資料：令和2年国勢調査)

藤崎町は圏域の北部に位置し、津軽平野を流れる三大河川の合流地点がある平坦で肥沃な土地に恵まれた農業を中心とする町です。

世界一の生産量を誇るりんご「ふじ」の発祥の地であることから、ブランド化や情報発信により一層努めており、減農薬や良質な土づくりにこだわった米やんにくづくりなど、安全安心な農産物の生育にも力を入れております。

町には、岩木山と調和した田園風景や白鳥が飛来する河川景観、中世の歴史を感じさせる史跡のほか、年縄奉納の伝統行事や津軽花火大会、ジャンボおにぎりをメインにしたイベント「ふじさき秋まつり」など、町の魅力発信に多様な資源が存在しています。

JR奥羽本線と五能線が走り、青森市や津軽半島地方を結ぶ主要道が交わることから、その恵まれた立地条件と交通の利便性を活かし、移住や企業立地の促進を図り、新しいまちづくりを推進しています。



ITAYANAGI TOWN

行政区域面積	人口	人口密度	0~14歳人口割合	65歳以上人口割合
41.88 km <sup>2</sup>	12,712人	303.5人/km <sup>2</sup>	●●%	●●%

(資料：令和2年国勢調査)

板柳町は圏域の北部に位置し、りんごを中心とする農業を基幹産業としており、「りんごまるかじり条例」を制定し、消費者に安心して安全なりんごを届ける取組に力を入れているほか、全国初りんご専門市場の誘致などりんごにこだわったまちづくりを展開しています。また、津軽藩時代には岩木川の河港として発展した歴史的経緯により、隣接する市町や弘前市の北部を含む独自の商業圏を形成している町であります。

生涯学習の町として、文化振興にも力を注ぎ「読書のまち」の定着など、住民との協働による町づくりを推進しています。また、基幹産業である農業では、地場産業の振興と地域資源を活用した「ふるさとセンター」を核として、高付加価値農業の推進と体験型観光農業の振興を図っています。さらに、国際交流推進のため、米国ヤキマ市との姉妹都市提携、中国北京市昌平区との友好協定の締結を行うなど、国際化、情報化など新たな時代に対応した未来を担う人づくりを推し進めています。

大鰐町

OWANI TOWN

行政区域面積	人口	人口密度	0~14歳人口割合	65歳以上人口割合
163.43 km <sup>2</sup>	8,671人	53.1人/km <sup>2</sup>	●●%	●●%

(資料：令和2年国勢調査)

大鰐町は圏域の南部に位置し、三方を山で囲まれた地形を利用したスキー場や、八百年もの長い歴史を誇る温泉の町として圏域の住民のみならず、県内外の保養地・観光地として親しまれ、発展してきた町であります。

平成15年には「第5回アジア冬季競技大会」のスキー種目が開催されるなど、競技スキーのメッカとしても広く知られており、大鰐碓ヶ関温泉郷県立自然公園を中心とした豊かな自然は四季を通じて、広域交流レクリエーション拠点として幅広く利用されています。

また、「大鰐温泉もやし」や「夏秋トマト」など町の特産品を活用した6次産業化を目指しています。

田舎館村

INAKADATE VILLAGE

行政区域面積	人口	人口密度	0~14歳人口割合	65歳以上人口割合
22.35 km <sup>2</sup>	7,328人	327.9人/km <sup>2</sup>	●●%	●●%

(資料：令和2年国勢調査)

田舎館村は圏域のほぼ中央の平地部に位置しており、縄文時代や弥生時代の遺跡が数多く確認され、なかでも弥生時代の水田跡が数多く発見された国史跡垂柳遺跡があります。

基幹産業を農業とし、米やりんごを中心にトマトやブロッコリー等の野菜や花卉の栽培のほか、いちごの生産にも力を入れており、温泉熱を活用したハウスで栽培・出荷している観光いちご園では、通年でいちご狩りが楽しめます。いちごのブランド化をはじめとした地場産品による商品開発や販路拡大の促進など、多方面にわたる農業振興策を展開し、農業の活性化と担い手の確保に向けて、農地の集約化と認定農業者の育成、支援に取り組んでいます。

また、毎年多くの人を訪れる田んぼアートなどの観光資源を活用し、交流人口の増加を図るなど、地域の活性化を目指しています。

工業団地等への企業誘致を推進し、雇用の創出を図るとともに、豊かな自然に親しみ、歴史と文化に触れることができる緑と工業の調和した農工併進の村づくりを進めます。

西目屋村

NISHIMEYA VILLAGE

行政区域面積	人口	人口密度	0~14歳人口割合	65歳以上人口割合
246.02 km <sup>2</sup>	1,265人	5.1人/km <sup>2</sup>	●●%	●●%

(資料：令和2年国勢調査)

西目屋村は圏域の西部に位置し、三方を山に囲まれ、総面積の9割以上を林野が占める山村であります。

広大で原生的なブナ林をいだけ世界自然遺産白神山地と津軽地方の水瓶の役割を果たしている津軽ダムを有する村として、自然と共生する村づくりを進めています。

人口・世帯数は県内で一番少なく、生活機能の大半を圏域の中心都市である弘前市に依存していますが、定住促進住宅の整備や0歳児以上の保育料無料化など子育て世代に優しい環境づくりを積極的に推進して、過疎化・少子化の抑制を図っています。

基幹産業は米とりんごを中心とした農業ですが、白神そばや山菜など白神ブランドによる地場産品の商品開発及び販路拡大を促進するとともに、世界遺産と水源の里として、白神山地と津軽ダムを活用した観光振興に取り組んでいます。



### 3 圏域の結びつき

弘前市は、圏域人口の約6割を占める圏域最大の都市で、周囲を中小規模の都市が比較的近い距離で取り囲む構造となっています。

圏域の北側に開かれた平野部では、国道や幹線道路、鉄道網などが充実しており、周辺市町村の中心部と緊密に連携しています。

古くから結びつきが深く生活圏を形成する周辺市町村とは、一部事務組合、広域連合及び企業団を設置し、消防・救急、ごみやし尿等の処理、介護認定審査事務、上水道事業を共同処理するなど、これまでも連携した取組を進めてきました。

日常生活においても、車社会の進展や交通インフラの整備・充実により、通勤・通学、医療、商業など、あらゆる面で住民の行動範囲は、広域的な結びつきを強めてきており、弘前市に集積されている都市機能が周辺にある市町村の住民によって利用されています。

表 人口総数及び昼夜間人口比率

	弘前市	黒石市	平川市	藤崎町	板柳町	大鰐町	田舎館村	西目屋村
人口総数(人)	177,411	34,284	32,106	15,179	13,935	9,676	7,783	1,415
昼夜間人口比率(%)	107.2	93.5	88.9	85.9	87.7	81.4	80.9	91.4

(資料：平成27年国勢調査)

#### (1) 都市機能の集積・利用状況

##### ① 通勤・通学者状況

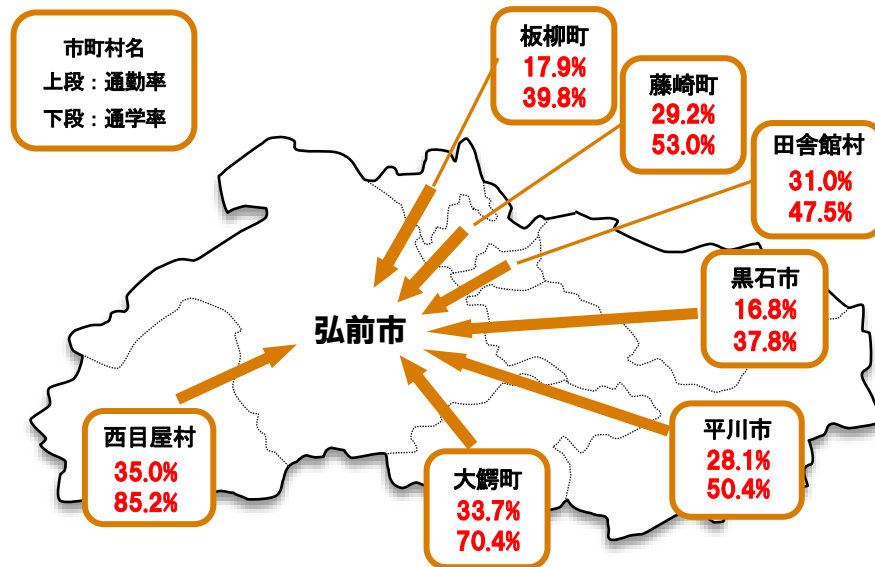
弘前市への通勤・通学者の割合は、周辺7市町村合計で26.1%となっており、全市町村が10%を超えています。特に、平川市は20%代後半、藤崎町、大鰐町、田舎館村、西目屋村は30%を超える高い割合となっています。

表 周辺市町村から弘前市への通勤・通学割合

市町村	常住する就業者・通学者		
	※15歳以上就業者・通学者	うち弘前市への就業者・通学者	通勤・通学割合
黒石市	19,296人	3,613人	18.7%
平川市	17,826人	5,334人	29.9%
藤崎町	8,698人	2,696人	31.0%
板柳町	8,497人	1,651人	19.4%
大鰐町	5,131人	1,856人	36.2%
田舎館村	4,371人	1,407人	32.2%
西目屋村	860人	328人	38.1%
合計	64,679人	16,885人	26.1%

(資料：平成27年国勢調査)

図 弘前市への通勤率・通学率



(資料：平成 27 年国勢調査)

表 弘前市内の製造業の事業所数及び従業員数（従業者 4 人以上の事業所）

事業所数	従業員数		従業者数	
	内従業者 30~299 人	内従業者 300 人以上	男	女
154	40	5	7,257 人	2,932 人

(資料：青森県の工業 (2020 年工業統計調査 青森県結果書))

表 弘前市内の卸売・小売業の事業所数及び従業員数

事業所数	従業員数		従業者数	
	卸売業	小売業	卸売業	小売業
1,833	376	1,457	14,949 人	11,066 人

(資料：平成 28 年経済センサス-活動調査)

表 弘前市内の高等教育機関（令和 3 年 4 月 1 日現在）

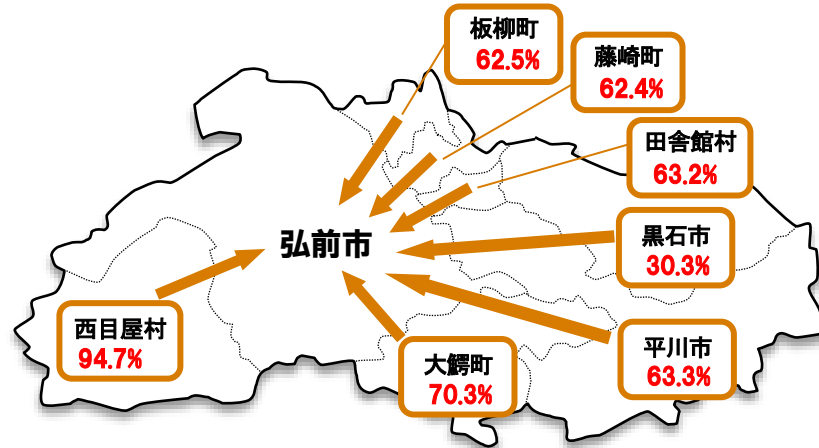
区分	学校数	内 訳 等
大学	5	国立大学法人弘前大学、柴田学園大学、弘前学院大学、弘前医療福祉大学、放送大学青森学習センター
高等学校	9	県立高等学校 5 校、私立高等学校 4 校
短期大学	2	柴田学園大学短期大学部、弘前医療福祉大学短期大学部
特別支援学校	4	国立大学法人弘前大学教育学部附属特別支援学校、弘前聾学校、第一養護学校、第二養護学校

② 医療機能

圏域の中核的医療機関である弘前大学医学部附属病院をはじめとして、総合病院が弘前市に集積しており、周辺市町村から多くの入院・受診者が訪れています。

入院患者の依存率は、黒石市の30.3%を除いた全ての市町村において60%を超える高い割合となっています。

図 弘前市内の医療施設への入院患者の依存率



(資料：平成30年4月青森県保健医療計画)

表 弘前市内の医療施設数・病床数 (令和元年10月1日現在)

病院		一般診療所		歯科診療所	合計	
施設数	病床数	施設数	病床数	施設数	施設数	病床数
15	3,310	163	553	93	271	3,863

(資料：令和元年青森県保健統計年報)

③ 商業機能

弘前市内の市街地及び郊外には、大規模なデパート、ショッピングセンターが立地しています。

店舗面積10,000㎡以上の大規模小売店舗の分布をみると、市街地の弘前駅・土手町周辺のほか、国道7号・102号などの幹線道路沿道に集中しており、弘前圏域を超え、秋田県北部も商圏に入っています。

表 圏域内の店舗床面積10,000㎡以上の大規模小売店舗数 (令和3年3月31日現在)

市町村	店舗数	店舗名
弘前市	7	中三弘前店、イトーヨーカ堂弘前店、さくら野弘前店、城東タウンプラザ、弘前駅前地区再開発ビル(ヒロロ)、イオンタウン弘前樋の口、安原ショッピングセンター
黒石市	1	アクロスプラザ黒石
平川市	1	イオンタウン平賀
藤崎町	1	イオン藤崎店

(資料：青森県「県内の大規模小売店舗一覧」)

#### ④ その他の都市機能

##### ■ 交通ネットワーク

公共交通機関は、JRが藤崎町、板柳町、大鰐町、田舎館村とつながっており、弘南鉄道、弘南バスが弘前市を中心に周辺市町村を結んでいます。

道路網も国道2路線のほか高い規格の道路が各市町村とつながっています。

公共交通	JR奥羽本線3駅 弘南鉄道弘南線4駅、大鰐線11駅 弘前バスターミナル
都市間バス	弘前⇄盛岡、仙台、東京、横浜
路線バス	弘南バス93路線
高速道路	東北自動車道 大鰐弘前IC
国道	国道7号、国道102号

##### ■ 金融機関

地方銀行、信用金庫、農業協同組合など各種金融機関の本店・支店が、弘前市内に集積しています。

銀行等	青森銀行、みちのく銀行、秋田銀行、青い森信用金庫、東奥信用金庫、青森県信用組合、東北労働金庫、つがる弘前農業協同組合、津軽みらい農業協同組合、相馬村農業協同組合、日本政策金融公庫 各本支店59店舗
-----	--

##### ■ 国及び県の機関

国及び県とも圏域を管轄する機関が幅広く弘前市に配置されています。

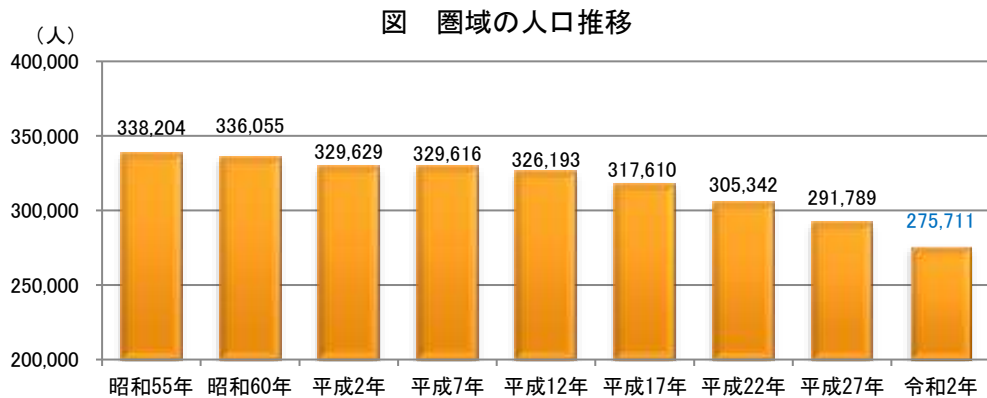
国の機関	青森地方裁判所弘前支部、青森地方法務局弘前支局、弘前税務署、弘前労働基準監督署、弘前公共職業安定所、弘前年金事務所、青森河川国道事務所弘前国道維持出張所、北奥羽土地改良調査管理事務所、津軽森林管理署、陸上自衛隊弘前駐屯地
県の機関	中南地域県民局（弘前保健所、中南地方福祉事務所、弘前児童相談所を含む）、弘前高等技術専門学校、中南教育事務所、弘前警察署、青森県運転免許センター弘前試験場、青森県産業技術センター弘前工業研究所

## 4 人口等の推移

### (1) 人口

令和2年国勢調査における構成8市町村の人口は275,711人で、平成27年に比べ16,078人(5.5%)減少しています。

構成市町村すべてにおいて人口が減少しており、平成27年との比較では、特に、西目屋村(人口減少率10.6%)、大鱈町(同10.4%)、板柳町(同8.8%)の順で人口減少率が高くなっています。



(資料：国勢調査)

表 市町村別人口推移(単位：人)

	昭和55年	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	令和2年
弘前市	192,291	192,989	191,217	194,197	193,217	189,043	183,473	177,411	168,564
黒石市	40,755	40,501	39,213	39,004	39,059	38,455	36,132	34,284	31,972
平川市	38,979	38,932	37,948	36,876	36,454	35,336	33,764	32,106	30,621
藤崎町	17,787	17,620	17,139	16,940	16,858	16,495	16,021	15,179	14,578
板柳町	19,215	18,504	17,766	17,320	16,840	16,222	15,227	13,935	12,712
大鱈町	16,312	15,313	14,751	13,990	12,881	11,921	10,978	9,676	8,671
田舎館村	10,053	9,722	9,370	9,151	8,835	8,541	8,153	7,783	7,328
西目屋村	2,812	2,474	2,225	2,138	2,049	1,597	1,594	1,415	1,265

(資料：国勢調査)

### (2) 年齢別人口

年齢別人口推移をみると、昭和55年から令和2年まで一貫して少子化・高齢化が進行しています。

年少人口は減少傾向が続いており、昭和55年に比べ人数、割合ともに約●割に減少しているのに対し、老年人口は人数、割合ともに約●倍に増加しています。

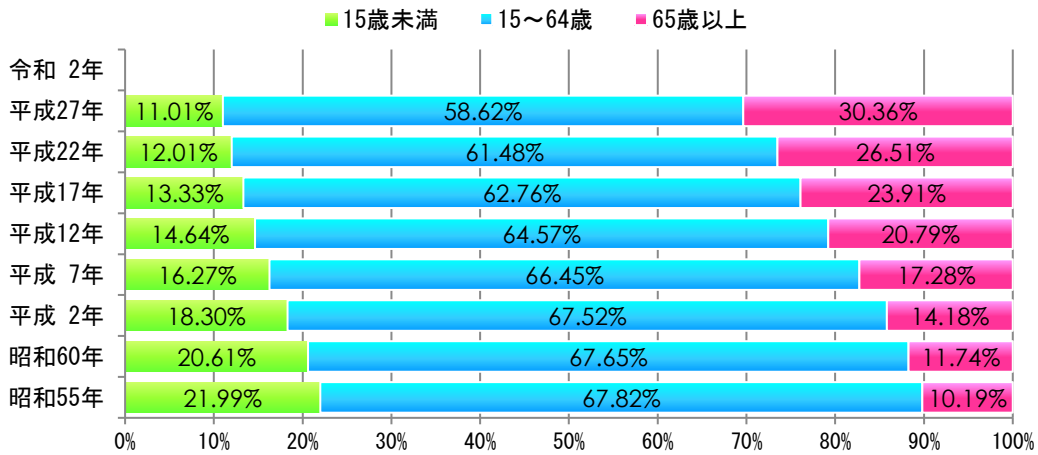
また、生産年齢人口は昭和55年に比べ、人数が●●, ●●●人(●●. ●%)の減少、割合が●●ポイント減少と、他の年齢2区分と比較すると変化は少ない状況にあります。

表 圏域の年齢3区分人口（単位：人）

	昭和55年	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	令和2年
0～14歳 (年少人口)	74,373	69,256	60,294	53,562	47,736	42,313	36,427	32,013	●●●
15～64歳 (生産年齢人口)	229,372	227,330	222,425	218,820	210,577	199,307	186,406	170,376	●●●
65歳以上 (老年人口)	34,459	39,465	46,720	56,897	67,789	75,929	80,363	88,244	●●●

(資料：国勢調査)

図 年齢3区分人口割合の推移



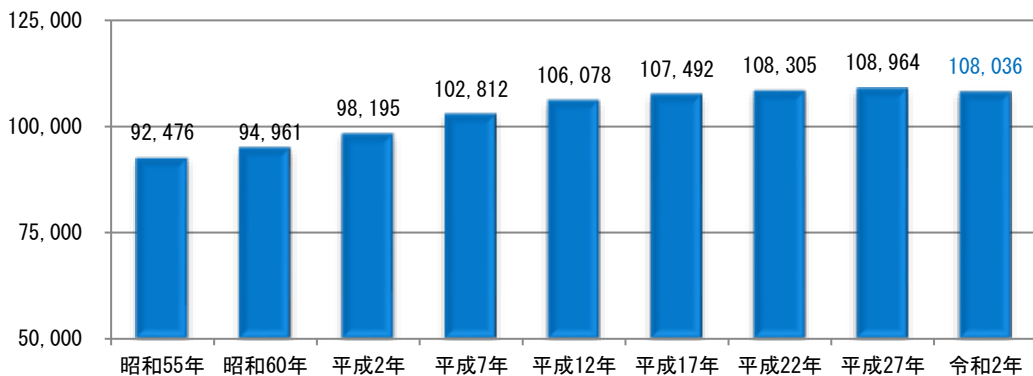
(資料：国勢調査)

### (3) 世帯

本圏域の世帯数は、人口の増減動態にかかわらず増加傾向にありましたが、令和2年では減少に転じており、構成市町村別に見ると、弘前市、黒石市、平川市、板柳町、大鰐町、西目屋村において、平成27年に比べ減少しています。

また、一世帯当たりの世帯人員の推移をみると核家族化の傾向が顕著に表れており、昭和35年に5.21人だったものが、平成2年では3.36人、令和2年では2.55人と本圏域内でも確実に核家族化が進んでいます。近年の傾向として、高齢者の1～2人世帯の増加が大きな要因となっていると考えられます。

図 圏域の世帯数推移



(資料：国勢調査)

表 市町村別世帯数推移（単位：世帯）

	昭和55年	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	令和2年
弘前市	56,933	58,921	61,807	66,003	68,296	69,251	70,142	71,152	70,789
黒石市	10,307	10,673	10,775	11,074	11,637	11,843	11,794	11,770	11,680
平川市	9,192	9,449	9,556	9,533	9,826	10,074	10,063	10,129	10,066
藤崎町	4,172	4,228	4,316	4,458	4,626	4,844	4,912	4,942	4,960
板柳町	4,660	4,693	4,764	4,795	4,828	4,858	4,770	4,680	4,476
大鱒町	4,267	4,086	4,065	4,021	3,921	3,794	3,648	3,421	3,228
田舎館村	2,290	2,286	2,287	2,313	2,343	2,402	2,406	2,382	2,400
西目屋村	655	625	625	615	601	469	570	488	437

(資料：国勢調査)

## (4) 圏域の将来推計人口及び将来展望人口

平成30年3月に公表された国立社会保障・人口問題研究所の推計結果によると、このまま推移した場合、令和27年の本圏域人口は平成27年と比較して105,547人(36.2%)減少するとされています。

各市町村では、「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を作成し、人口減少対策に関する各種施策を継続的に実施していくことにより人口減少のスピードを緩和し、将来展望人口は、将来推計人口と比較し18,910人(10.2%)増加の205,152人を目標としています。

表 圏域の将来推計人口及び将来展望人口（単位：人）

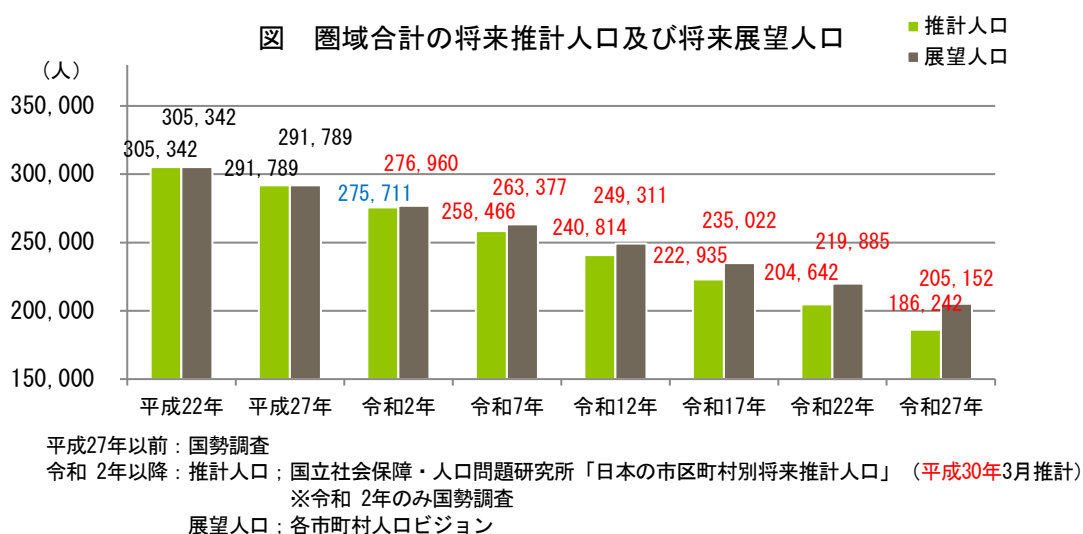
		平成22年	平成27年	令和2年	令和7年	令和12年	令和17年	令和22年	令和27年
弘前市	推計人口	183,473	177,411	168,564	160,705	151,287	141,559	131,389	120,920
	展望人口	183,473	177,411	169,667	162,777	155,056	146,573	137,144	127,702
黒石市	推計人口	36,132	34,284	31,972	29,741	27,468	25,111	22,704	20,340
	展望人口	36,132	34,284	32,459	30,717	28,944	27,086	25,139	23,238
平川市	推計人口	33,764	32,106	30,621	28,238	26,245	24,259	22,213	20,154
	展望人口	33,764	32,106	30,357	28,828	27,461	26,267	25,190	24,051
藤崎町	推計人口	16,021	15,179	14,578	13,400	12,460	11,502	10,519	9,522
	展望人口	16,021	15,179	14,330	13,508	12,664	12,110	11,528	10,950
板柳町	推計人口	15,227	13,935	12,712	11,214	9,917	8,691	7,521	6,428
	展望人口	15,227	13,935	12,543	11,240	10,030	8,898	7,820	7,078
大鱒町	推計人口	10,978	9,676	8,671	7,292	6,225	5,274	4,417	3,649
	展望人口	10,978	9,676	8,791	7,965	7,224	6,543	5,892	5,304
田舎館村	推計人口	8,153	7,783	7,328	6,788	6,259	5,712	5,162	4,618
	展望人口	8,153	7,783	7,437	7,098	6,790	6,486	6,184	5,911
西目屋村	推計人口	1,594	1,415	1,265	1,088	953	827	717	611
	展望人口	1,594	1,415	1,376	1,244	1,142	1,059	988	918
圏域合計	推計人口	305,342	291,789	275,711	258,466	240,814	222,935	204,642	186,242
	展望人口	305,342	291,789	276,960	263,377	249,311	235,022	219,885	205,152

平成27年以前：国勢調査

令和2年以降：推計人口；国立社会保障・人口問題研究所「日本の市区町村別将来推計人口」（平成30年3月推計）

※令和2年のみ国勢調査

展望人口；各市町村人口ビジョン



## 5 東日本大震災、新型コロナウイルス感染症感染拡大を受けて

### ■ 東日本大震災

平成23年3月11日に発生した東日本大震災によって、東日本の太平洋沿岸が全域的に大きなダメージを受けたことにより、日本海地域への産業の再配置や物流拠点の分散化、鉄道貨物ルートの重層化などの必要性が再認識されるとともに、交流・物流を含めた社会基盤の在り方、エネルギー政策の在り方、防災対策の在り方などについて、大きな歴史的転換点をもたらしました。

安心・安全な食料、自給できるエネルギーといった観点から、外部環境の変化に大きく影響されないような地域をつくりあげ、地域の自立や連携を確かなものとし、真に持続可能な地域の創造につなげていく必要があります。

### ■ 新型コロナウイルス感染症

新型コロナウイルス感染症は、令和元年末頃から世界規模での流行が見られ、国内でも、国の緊急事態宣言の発令に伴う全国的な外出自粛の要請や小・中学校の臨時休業など社会全体に大きな影響を及ぼし、本圏域においても、各種まつりやイベントの中止、公共施設の休館、飲食店への時間短縮営業等の協力依頼を行うなど、地域住民の生活や経済に大きな影響が生じました。

デジタル技術活用の加速化、ライフスタイルや価値観の変化など、社会情勢が変化する中で、ウィズコロナ・ポストコロナ時代を見据え、新型コロナウイルス感染症の影響に的確に対応するために、政策や施策を柔軟に変化させ、圏域全体の活性化に向けて取り組む必要があります。

今後も、新たな感染症や自然災害など、予想困難な危機が訪れるとの前提に立ち、危機に際しても圏域全体の活性化に向けた取組を止めることがないよう、社会情勢の変化への対応力をより一層高めていく必要があります。



## 6 生活機能

### (1) 産業

本圏域は、戦前戦後を通じて今日まで米とりんごを中心とした農業が**発展**し、主要な食料産地としての役割を担ってきました。

現在の産業構造は、生産額・就業人口とも第3次産業の占める割合が非常に高く、次いで第2次産業、第1次産業の順となっておりますが、第1次産業の比率は全国及び県に比べても高い割合であり、そのほとんどを占める農業は、産業全体に占める比率が年々低下傾向にあるものの依然として高い水準にあります。

また、第1次産業から第3次産業の個々の産業は、**それぞれが**独立しているものではなく、地域の生産・加工品が産地直売所などを通して、その地域で販売・消費される地産地消のように、農産物の生産（第1次産業）、食品加工（第2次産業）、流通・販売（第3次産業）がそれぞれ結びついて活動しています。地域の基幹産業である農業と商業・工業等の産業間がさらに連携し、地域資源を積極的に活用した付加価値の高い製品の開発が今後の課題となっています。

さらに、観光面においても、地域産業を活かした誘客や観光客の増加に伴う販売需要の拡大など、他の産業との相乗効果による地域活性化が期待されます。

図 総生産の経済活動別構成

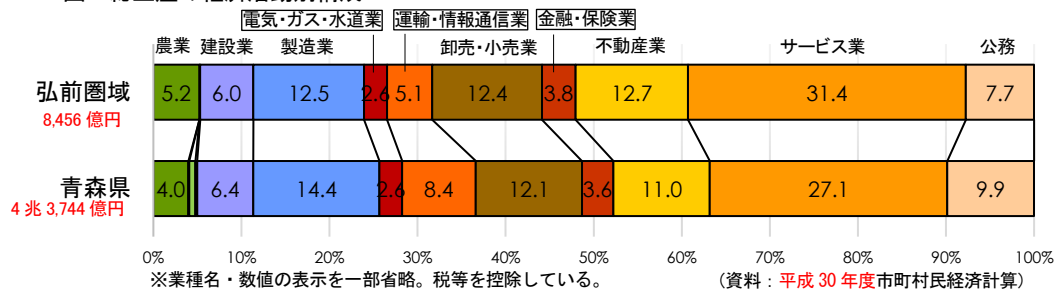
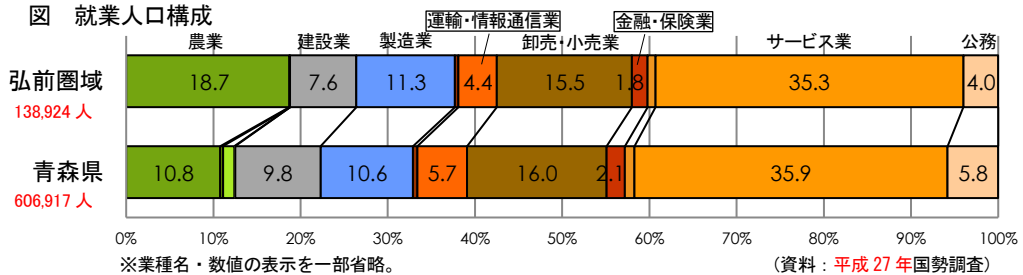


図 就業人口構成



### ■ 農業

農業は、これまで米とりんごを中心に本圏域を支えてきた重要な産業であります。

しかし、**近年、これまで経験したことのない自然災害や新型コロナウイルス感染症の脅威が経済全般に大きな影を落としており、農業への影響が懸念される状況となっています。**さらに、農業者の高齢化や後継者不足による就業人口の減少といった課題に加え、近年では、国内外を問わない産地間競争の激化、「食」の安全・安心や健康志向といった消費者

ニーズの多様化などに対応するため農業経営の効率化・高度化による生産性の向上、**販路開拓**など農業収益の拡大が喫緊の課題となっています。

また、弘前市・西目屋村地域において、有害鳥獣による農作物被害が後を絶たず、特に猿の被害は深刻化している状況にあり、両地域が連携して対策を講じていく必要があります。

さらに、国土や自然環境の保全などの多面的機能の発揮、農地・水・担い手等の生産要素の確保などが求められており、農業を取り巻く課題は農業という産業の枠組みを越え、その解決には農業を支える地域全体の活性化が不可欠となっています。

表 弘前市及び西目屋村の猿による農作物被害の状況

(単位：千円)

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
弘前市	8,355	6,841	6,932	3,963	5,848	1,813	5,702	5,304
西目屋村	432	649	775	847	1,043	475	278	386
計	8,787	7,490	7,707	4,810	6,891	2,288	5,980	5,690

(資料：青森県食の安全・安心推進課まとめ)

表 弘前市及び西目屋村の主な猿対策事業

年度	弘前市	西目屋村
平成28年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>ハンターによる追い払い及び捕獲</li> <li>鳥獣駆除用煙火取扱い講習会の実施</li> <li>電気柵の設置</li> <li>猟銃所持許可・狩猟免許の取得経費補助</li> <li>ロケット花火無償提供</li> <li>箱わな等の捕獲機材の導入</li> <li>捕獲奨励金制度の実施</li> <li>テレメトリー発信器の取り付けによる群れの行動域等の調査</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>巡視員による追い払い及び捕獲</li> <li>電気柵修繕資材無償提供</li> <li>猟銃所持許可・狩猟免許の取得経費補助</li> <li>ロケット花火無償提供</li> <li>捕獲奨励金制度の実施</li> <li>センサーカメラ(村所有)による鳥獣出没状況把握</li> <li>猟友会による一斉捕獲の実施</li> </ul>
平成29年度		<ul style="list-style-type: none"> <li>巡視員による追い払い及び捕獲</li> <li>電気柵修繕資材無償提供</li> <li>簡易電気柵及び電気部品の更新に対する補助</li> <li>猟銃所持許可・狩猟免許の取得経費補助</li> <li>ロケット花火無償提供</li> <li>捕獲奨励金制度の実施</li> <li>センサーカメラ(村所有)による鳥獣出没状況把握</li> <li>猟友会による一斉捕獲の実施</li> </ul>
平成30年度 令和元年度 令和2年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>ハンターによる追い払い及び捕獲</li> <li>鳥獣駆除用煙火取扱い講習会の実施</li> <li>電気柵の設置</li> <li>猟銃所持許可・狩猟免許の取得経費補助</li> <li>ロケット花火無償提供</li> <li>箱わな等の捕獲機材の導入</li> <li>捕獲奨励金制度の実施</li> <li>テレメトリー発信器の取り付けによる群れの行動域等の調査</li> <li>GPS発信器の取り付けによる群れの行動域等の調査</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>巡視員による追い払い及び捕獲</li> <li>電気柵修繕資材無償提供</li> <li>簡易電気柵及び電気部品の更新に対する補助</li> <li>猟銃所持許可・狩猟免許及びライフル銃所持許可の取得経費補助</li> <li>ロケット花火無償提供</li> <li>捕獲奨励金制度の実施</li> <li>センサーカメラ(村所有)による鳥獣出没状況把握</li> <li>猟友会による一斉捕獲の実施</li> </ul>

## ■ 工業

本圏域の工業は、リーマンショックの影響が落ち着いた平成23年以降、平成29年まで製造品出荷額等の増加傾向が続き、経済の発展に寄与してきました。

一方で、東日本大震災や全国各地での豪雨や台風といった自然災害、米中貿易摩擦、新型コロナウイルス感染症の拡大など、国内経済に影響を及ぼす予期せぬ事態が続いており、令和2年の東北6県における工場等の立地件数及び立地面積が昭和42年の調査開始以来、最少となりました。

また近年においては、新型コロナウイルス感染症の流行に伴う巣ごもり需要等の拡大に

よる物流の需給逼迫や、製造・販売事業者等による廃プラスチックの再資源化など環境保全に対する取組、生産性向上等に対応するためのデジタル化の必要性など、製造業を取り巻く環境の変化が大きな影響を与えるとともに加速化していくことが予想されます。

このような環境の変化に対応していくためにも、立地可能な用地への誘致活動のほか、各市町村の空き物件などの情報収集による受け皿の確保に加え、立地環境や事業者のニーズに応じた優遇制度の整備を実施し、これらの積極的なPRを進めていく必要があります。

### ■ 商業・サービス業

経済センサス及び商業統計調査によると、本圏域における商店数は、昭和60年以後減少傾向に転じたまま、少子高齢化やインターネット販売の隆盛による消費構造の変化などを受け、依然、減少傾向に歯止めがかかっていない状況が続いています。また、従業者数についても、平成19年調査以降は減少に転じ、雇用機会が狭まっており、住民の生活を支える商業機能が年々弱くなりつつあります。中心市街地や商店街など既存の商業集積地においても空き店舗の増加が進み、かつてのにぎわいを失っている状況ですが、各市町村において効果的な対応策を見出せず、苦慮しています。

このため、消費者ニーズの変化への対応や、観光分野と連携した交流人口の増加による消費向上など、事業者や各種団体、行政等が一体となった積極的な取組を、引き続き進めていく必要があります。

### ■ 観光

本圏域は、歴史的文化遺産や四季それぞれのまつりを有する弘前市をはじめ、各市町村とも特徴的な観光資源を抱えています。

車社会化や個性的余暇利用、高速交通体系の整備などにより、観光地への遠隔地移動が容易になるとともに、平成22年12月の東北新幹線新青森駅開業により、首都圏からのアクセスが大きく向上しました。

近年の観光に対する国民的志向は、単に観光地を巡る「見る」観光から、旅行先で「体験・滞在する」観光へと変化しており、本圏域の自然や四季の移ろい、安全・安心な農産物、地域文化・生活文化、歴史などの地域資源などを訪問者に全身で満喫してもらう新しい観光の形としてグリーン・ツーリズムを推進するとともに、コンベンション誘致による都市型ツーリズムの展開も考えていかなければなりません。

また、ウィズコロナ・ポストコロナ時代の新しい生活様式や観光ニーズに訴求するために、これまでの観光戦略を再構築するとともに、本圏域に潜在、顕在する観光素材の掘り起こしと磨き上げ等を引き続き行い、マイクロツーリズムを推進する必要があります。

そのため、弘前市をはじめとした本圏域の各市町村は津軽地域をマネジメントエリアとして設立された地域連携DMO（一般社団法人C l a n P E O N Y津軽）へ参画しており、広域的な観光振興に積極的に取り組んでおります。

さらに、令和5年に世界自然遺産登録30周年を迎える白神山地などの自然景観をはじめ、当地域の都市景観、農村景観などを効果的に保全・創造し、美しい景観づくりを推進していく必要があります。

併せて、当地域の課題である冬季観光についても、ひとつの資源として活用を進め情報発信していく必要があります。

## (2) 医療

本圏域における医療施設、医療従事者及び病床数は、人口10万人比でいずれも県平均を上回っており、医療サービスの水準は全般的に高く、弘前大学医学部附属病院を核とした医療施設群は、津軽一円、青森県及び北秋田地域を含めた広域医療の中核としての役割を担っています。

救急医療については、初期救急への対応として、昭和62年4月に、休日と夜間の小児科と内科による「弘前市急患診療所」を弘前総合保健センター内に設置しており、平成27年10月から休日の外科診療も実施しているほか、休日在宅医療として、**内科**、眼科、耳鼻いんこう科、歯科を実施しています。また、弘前市内の病院で輪番制方式により第二次救急医療を実施するとともに、平成22年7月に、第三次救急医療施設として弘前大学医学部附属病院高度救命救急センターが開設され、**救命措置が必要な重篤な患者への医療**を担っており、**全世代に対応した救急医療提供体制を確保してきました。**

令和4年度からは、**青森県地域医療構想を踏まえた、圏域の中核病院である弘前総合医療センター(仮称)の整備により、これまで体制の維持が課題となっていた第二次救急医療体制の再構築が図られたところですが、安定した医療提供体制を維持していくためには、圏域全体での一層の連携を図る必要があるほか、民間医療機関における医師の高齢化等による、救急対応を担う医師の確保が課題となっております、弘前大学医学部附属病院や医師会をはじめとした関係医療機関等の協力のもと、救急医療体制の維持を図っていく必要があります。**

表 病院・一般診療所・医師の状況

	病 院									一般診療所		人口10万人当たり 病床数	医 師	
	施 設 数			病 床 数					施設数	病床数	実数		人口10万人 当たり 医師数	
	精神	一般		精神	感染症	結核	療養	一般						
弘前市	15	3	12	3,310	701	6	-	360	2,243	163	553	2,265	811	470.3
黒石市	3	1	2	663	193	-	-	114	356	17	10	2,085	56	171.1
平川市	-	-	-	-	-	-	-	-	-	19	38	123	17	54.7
藤崎町	1	-	1	149	-	-	-	42	107	8	19	1,141	16	107.9
板柳町	1	-	1	80	-	-	-	32	48	5	36	891	8	60.3
大鰐町	1	-	1	30	-	-	-	-	30	6	-	343	8	89.1
田舎館村	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	19	254	1	13.2
西目屋村	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
圏域計	21	4	17	4,232	894	6	-	548	2,784	221	675	1,759	917	324.9
県総数	94	17	77	17,106	4,342	29	33	2,838	10,064	877	1,942	1,529	2,712	214.7

(資料：令和元年青森県保健統計年報)

## (3) 福祉

### ■ 児童福祉

近年、子どもを巡るさまざまな問題が深刻化するなか、社会全体で子どもと子育て家庭を支える環境づくりが喫緊の課題となっています。また、子どもの自主性や社会性を育み、心身共にたくましい、健やかな成長を図ることが重要となっています。

子どもを心身共に健全に育成していくためには、遊びの場の整備や遊び活動の充実、非行防止のための指導・相談体制の充実などを図り、家庭、学校、地域、企業、行政等が連携・協力し、子どもがたくましく豊かに育つ環境を確保していかなければなりません。

また、急速な少子化の進行に歯止めをかけるためには、さまざまなニーズを持つ子育て家庭に適切な支援をすることが重要であり、ワーク・ライフ・バランスの実現による仕事と子育ての両立支援や、地域社会全体で子育てを見守り、支え合う体制を整えるなど、安心して子どもを産み育てることができる環境づくりに取り組んでいく必要があります。

表 幼稚園等の施設数及び在籍児童数の状況

区分	幼稚園		認定こども園		保育所		認可外保育施設※		（うち企業主導型保育施設）		計	
	施設数	在籍児童数	施設数	在籍児童数	施設数	在籍児童数	施設数	在籍児童数	施設数	在籍児童数	施設数	在籍児童数
弘前市	7	358	30	2,300	39	2,509	12	266	(3)	(166)	68	5,453
黒石市	1	16	12	744	4	238	-	-	-	-	17	998
平川市	1	18	10	790	3	207	1	7	(1)	(7)	15	1,022
藤崎町	1	9	3	306	3	215	-	-	-	-	7	530
板柳町	-	-	2	168	3	174	-	-	-	-	5	342
大鰐町	-	-	1	96	2	105	-	-	-	-	3	201
田舎館村	-	-	1	93	2	140	1	20	-	-	4	253
西目屋村	-	-	-	-	1	31	-	-	-	-	1	31
圏域計	10	401	59	4,497	57	3,619	14	313	(4)	(173)	140	8,830

（作成：弘前市企画課 令和3年4月1日現在）

### ■ 高齢者福祉

急速な高齢化が全国的に進行しており、本圏域においても65歳以上人口の割合は、令和2年国勢調査の結果では約●●%に及び、確実に高齢化が進んでいる状況であり、介護の問題が老後の最大の不安要因となっています。

介護を社会全体で支え、利用者の希望を尊重した総合的なサービスが安心して受けられるよう、平成12年4月1日から介護保険制度が始まりましたが、本圏域では、制度開始に先立って、津軽広域連合において、要介護状態区分の判定を行う介護認定審査会を設置しており、圏域の審査判定業務を一括して行っています。

高齢者福祉対策は、国・県・市町村などが一体となって推進していかなければなりません。高齢者が「できない」ことより「できる」ことに目を注ぎ、可能性を十分に発揮できるような機会を提供していくことが重要であります。また、社会参加促進のため、高齢者が安心して生活できるようなまちづくりに取り組んでいく必要があります。

また、少子高齢化の進行や高齢者世帯の核家族化などに伴い、地域コミュニティの希薄化による地域の支え合いの低下が懸念されている中、認知症高齢者の増加や知的・精神障がい者の親亡き後に関連する対応も求められています。認知症高齢者や障がいのある人が地域から孤立することなく、住み慣れた地域で安心して、誰もがその人らしく暮らすことができるよう、成年後見制度を含む権利擁護支援の必要性が高まっています。

## （4）教育

### ■ 義務教育

近年、少子化による学校規模の縮小化が進む中、市街地の伸展に伴う人口移動によって、市街地周辺の一部の学校では児童生徒数の増加が見受けられる一方、市街地中心部・農村部では減少傾向が顕著であり、圏域全体においては今後、大幅な生徒数の減少が見込まれており、通学区域の改編や学校の統廃合に伴う校舎の増改築などについて、具体的な検討が必要となっています。

グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境などが大きく、また急速に変化する予測困難な時代にあって、学校教育においては、子供たちが様々な変化

に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め、知識の概念的な理解や情報の再構成により新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で自らの目的を再構築することができるようにすることが求められています。

少子・高齢化や核家族化の進行、地域の連帯感の希薄化など地域社会が変化するなか、地域の教育力の低下が懸念されており、学校・家庭・地域社会などさまざまな主体が連携しながら、地域が一体となって地域の教育力を高めるとともに、地域に暮らす人々が、子どもたちの教育活動や社会参加活動に関わり、結果として魅力ある地域づくりへとつながるようなネットワークの構築などを推進する必要があります。

表 小中学校数・学級数・児童・生徒数の状況

区分	小学校					中学校				
	学校数	学級数	児童数			学校数	学級数	生徒数		
			計	男	女			計	男	女
弘前市	35	385	7,337	3,733	3,604	18	166	4,101	2,077	2,024
黒石市	4	60	1,362	687	675	2	25	677	336	341
平川市	9	84	1,380	708	672	4	33	694	339	355
藤崎町	3	35	692	343	349	2	15	352	182	170
板柳町	4	31	529	274	255	1	11	288	139	149
大鰐町	1	14	257	142	115	1	8	148	74	74
田舎館村	1	15	364	190	174	1	8	170	81	89
西目屋村	1	7	67	29	38	-	-	-	-	-
圏域計	58	631	11,988	6,106	5,882	29	266	6,430	3,228	3,202

(資料：令和2年度学校基本調査)

## ■ 高等教育

本圏域は、弘前大学をはじめとする高等教育機関が集積し、青森県のみならず北奥羽の学術拠点となっています。

その中心である弘前大学は、平成16年4月から国立大学法人へ移行されたことに伴い、教育研究や地域貢献等への柔軟な対応が求められています。本圏域としても、長期的展望に立った弘前大学の発展のため、強固な連携体制を築く必要があります。

また、各高等教育機関が持つ研究成果などの知的資源及び学生などの人的資源を地域社会に活かすために、本圏域に所在する5つの高等教育機関により構成されている「学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアム」との連携を推進していく必要があります。

### ※学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアム

高等教育機関のさらなる魅力と質の向上を高めるとともに、教育・文化・観光産業・医療の振興などの分野を通じて、地域の自立と発展に向け一層の貢献を図っていくことを目指し、市内の6高等教育機関の連携により平成19年10月22日に設立された組織。令和3年4月に構成大学であった東北女子大学及び東北女子短期大学が柴田学園大学となったため、現在は5高等教育機関により構成されている。

## (5) 文化

### ■ 文化財

本圏域には、長い歴史の中で、今日まで保存継承されてきた有形・無形の数多くの文化遺産があり、国指定文化財等が112件、県指定文化財が88件、市町村指定が325件となっています。(令和3年度青森県の文化財保護行政)

しかし、生活様式の近代化等により環境が著しく変化し、遺跡や歴史的建造物、風習等が失われていくことが懸念されます。

貴重な観光資源でもある文化財に対する住民の理解と保護意識高揚のためには、身近な存在として感じてもらえる施策の展開、情報発信に努める必要があります。

そして、保存継承はもとより、積極的に活用・公開することが必要となっています。

表 文化財の指定状況

区分	国指定文化財等						県指定文化財	市町村指定文化財	合計
	指定文化財	選定	登録	記録選択	重要美術品旧法	計			
弘前市	35	1	19	2	1	58	60	147	265
黒石市	2	1	2	0	0	5	11	34	50
平川市	2	0	40	0	0	42	10	71	123
藤崎町	0	0	0	0	0	0	2	13	15
板柳町	0	0	0	0	0	0	2	33	35
大鱒町	1	0	2	0	0	3	1	16	20
田舎館村	1	0	0	0	0	1	2	10	13
西目屋村	0	0	0	0	0	0	0	1	1
複数の市町村	2	0	0	1	0	3	0	0	3
圏域計	43	2	63	3	1	112	88	325	525

(資料：令和3年度青森県の文化財保護行政)

### ■ 芸術・文化

本圏域では、各種文化施設を拠点として数多くの芸術文化団体が活発な活動を展開し、地域文化の向上に努めています。

文化の担い手は住民であるため、活動団体への支援や実技講座の拡充を図るなど、新たな地域文化の創造に努めていく必要があります。

## (6) 環境

### ■ 生活環境

- 上水道は、昭和63年11月から浅瀬石川ダムを水源とする津軽広域水道企業団が給水を開始し、平成7年には久吉ダム広域水道事業が完了し、給水を開始しています。

現在稼働中の津軽ダムには、岩木川流域に広がる津軽平野の治水、かんがい用水・水道用水・工業用水の供給、発電という大きな役割が期待されています。

- 下水道は、汚水処理施設の整備が年々向上し、青森県全域の整備率と比較しても整備が進んでいる状況にあります。

岩木川の水質を保全しつつ生活環境を改善するため、岩木川中流部の6市町村の汚水を広域的に処理する岩木川流域下水道事業が、昭和54年に採択され事業が進められてきましたが、平成2年度に5町村を追加し、現在は8市町村（合併後の市町村数）で事業を進めています。また、昭和62年度に下水道の中心施設である岩木川浄化センターが完成し、供用を開始しています。弘前市の下水処理場は、平成27年4月に岩木川浄化センターへ統合し、汚水を一元化処理しています。

今後とも、各市町村の下水道整備は、岩木川流域下水道事業との連携強化が重要となっています。

- ごみ処理のため圏域内には、弘前市を中心とする弘前地区環境整備事務組合（構成6市町村）と黒石市を中心とする黒石地区清掃施設組合（構成5市町村）の2つの一部事務組合があり、広域処理を行っています。

今後、人口減少や既存施設の老朽化に伴う維持更新コスト増大が予想される中、効率的・安定的にごみ処理を行うため、令和元年10月に「津軽地域ごみ処理広域化協議会」

が設置され、令和8年度からの広域化を目指し、弘前地区環境整備事務組合と黒石地区清掃施設組合の統合の協議が進められています。

- し尿及び浄化槽・農業集落排水汚泥は、下水道の普及や人口減少により減少していくものと思われていますが、今後も一定量の発生が見込まれます。これまで弘前地区環境整備事務組合、黒石地区清掃施設組合がそれぞれ処理を行ってきましたが、両組合の処理施設の老朽化や処理能力の低下に伴う更新時期に合わせ、MICS事業（污水处理施設共同整備事業）として、県の岩木川浄化センター内に「し尿等希釈投入施設（名称：津軽広域クリーンセンター）」を建設し、平成27年10月から圏域内のし尿等を共同処理しており、広域的集約処理による污水处理事業の効率化や施設管理・運営等の経費削減に寄与しています。
- カラスによるごみの食い散らかしについては、集積ボックス設置や防鳥ネットの普及により減少していますが、道路のふん害など市内の環境美化への影響は、特に冬季に問題となっていて、LEDライトによる追い払いなどを行っているものの、決定的な対策となっていません。

近年、個体数は減少傾向にあります。弘前大学によるGPSを装着した行動域調査の実施や圏域全体での収穫残さの回収の徹底を周知していくことにより、個体数の更なる減少につながることを期待されます。

表 弘前市におけるカラスの状況

(単位：羽)

個体数	平成28年度			平成29年度		
	4,640	3,297	5,774	3,371	2,756	1,437
調査実施日	H28.10.26	H29.1.26	H29.2.22	H29.10.27	H30.2.2	H30.2.24
調査場所	弘前公園周辺	弘前駅周辺	弘大病院周辺	弘前公園及び弘前駅周辺	旧大成小周辺	弘大病院周辺

個体数	平成30年度			令和元年度		令和2年度	
	3,831	2,942	3,595	3,359	2,489	3,728	3,902
調査実施日	H30.10.27	H31.1.26	H31.2.9	R2.2.8	R2.2.16	R2.11.7	R3.2.6
調査場所	弘前公園及び弘前駅周辺	弘前駅周辺	第五城東周辺	弘前公園周辺	弘前大学周辺	弘前公園周辺	弘前大学周辺

(資料：弘前市調査データ)

表 弘前市の主なカラス対策事業

年度	事業内容	年度	事業内容
平成25年度 ～ 平成28年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ごみ集積ボックス設置費補助</li> <li>・箱わなによるカラス捕獲</li> <li>・ごみ集積所への黄色防鳥ネット設置</li> <li>・高層建物等設置用テグスの提供</li> <li>・追い払い道具（LEDライト）の貸出</li> <li>・糞清掃用具の提供</li> <li>・カラス対策連絡協議会の開催</li> </ul>	令和元年度  令和2年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ごみ集積ボックス設置費補助</li> <li>・箱わなによるカラス捕獲</li> <li>・ごみ集積所への黄色防鳥ネット設置</li> <li>・高層建物等設置用テグスの提供</li> <li>・追い払い道具（LEDライト）の貸出</li> <li>・糞清掃用具の提供</li> <li>・カラス対策連絡協議会の開催</li> <li>・カラスにGPS装着し行動調査</li> <li>・農作物や果実の収穫徹底お願いの周知</li> </ul>
平成29年度 平成30年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ごみ集積ボックス設置費補助</li> <li>・箱わなによるカラス捕獲</li> <li>・ごみ集積所への黄色防鳥ネット設置</li> <li>・高層建物等設置用テグスの提供</li> <li>・追い払い道具（LEDライト）の貸出</li> <li>・糞清掃用具の提供</li> <li>・カラス対策連絡協議会の開催</li> <li>・鷹匠によるカラスの追い払い</li> </ul>		

- 適正に管理されていない空き家及び空き地は、防犯、防災、衛生、景観、安全を阻害するなど、地域住民の生活環境に悪影響を及ぼしておりますが、人口減少や少子高齢化の進行等を背景に、全国的に空き家及び空き地が年々増加しており、本圏域においても共通する課題となっています。



安心して暮らせる生活環境確保のため、圏域市町村や関係事業者等が連携して、空き家及び空き地の利活用や予防に、継続的に取り組む必要があります。

- 消費者を取り巻く生活環境は、高齢世帯の増加やインターネット、SNS の利用拡大などの進展等により目まぐるしく変化しています。

近年では、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、消費者の不安に付け込んだ詐欺等の被害も報告されており、また、令和4年度から施行される18歳への成年年齢引き下げに伴い、若年層の消費者被害が懸念されるなど、消費者と事業者とのトラブルは、今後ますます複雑化・高度化することが予想されます。

本圏域では、地域住民の安全・安心な消費生活を確保するため、弘前市市民生活センターを圏域の消費生活相談窓口として活用し、広域的な情報の収集と共有により消費者被害の未然防止や早期解決を図っていますが、今後も、地域住民や関係機関との連携を深めながら、被害防止や自立した消費者の育成に向けて、取組を継続する必要があります。

## ■ 自然環境

本圏域は、津軽のシンボル岩木山をはじめ、世界自然遺産である白神山地、南八甲田等から連なる豊かな森林地帯に囲まれており、その輪の中に、岩木川水系の河川が潤す水田、りんご園が広がる豊かな自然環境に恵まれています。

一方、環境問題の影響は、年間の平均気温が確実に上昇していることや、酸性雪が確認されているなど、本圏域においても危惧されています。

自然環境は貴重な資源であり、よりよい環境を次世代に継承していくことは、今生きている私たちの義務であることから、この豊かな自然環境を保護するとともに自然環境に配慮した活用を図って、自然と人間が調和した環境を整備していく必要があります。

## (7) 地域防災

本圏域は、岩木山、白神山地、南八甲田等の山地に囲まれ、その中を、岩木川、浅瀬石川、平川などの大小の河川が貫流しています。

その環境は、圏域住民に潤いを与える反面、水害や土砂災害などによる被害を受ける可能性が常にある地域であることを示しています。

過去には、昭和33年、50年、52年の岩木川、土淵川、寺沢川などの水害や急傾斜地区等の土砂災害のほか、平成3年の台風第19号、平成16年度、17年度の豪雪など様々な災害に見舞われています。

昭和58年5月26日の日本海中部地震では、弘前市で震度5を観測し、圏域の建物等が被害を受けました。

各機関の研究によると、今後も太平洋沖、日本海沖の地震発生が想定されており、本圏域においても大きな被害を受ける可能性は十分にあると思われます。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災は、停電や流通経路等の被災により生活物資の供給量が著しく低下するなど、圏域住民の生活や経済活動にも大きな影響を及ぼしました。この震災は、我が国の防災対策等を根本的に見直す転換点となった災害であり、私たちに自然の脅威を知らしめるとともに、避難、情報収集・伝達や備蓄体制などの課題を突き付け、あらゆる災害に常に備えておく体制が不可欠であることを改めて実感させら

れました。

今後は、本圏域に多くの被害をもたらした過去の風水害、土砂災害、雪害などからの教訓に加え、東日本大震災において課題となった情報収集・伝達体制や避難体制の充実強化、備蓄体制の整備に努める必要があります。

また、行政が主体の「公助」のほか、自分の命は自分で守る「自助」、自分たちの地域は自分たちで守る「共助」がそれぞれの役割をしっかりと担いつつ相互に連携・協働した防災・減災対策を進め、災害によるリスクの少ない圏域を創出していかなければなりません。

## 7 結びつきやネットワーク

### (1) 交通ネットワーク

#### ■ 鉄道

圏域内を通る鉄道は、JR 奥羽本線及び五能線と弘南鉄道大鰐線及び弘南線があります。

JR 奥羽本線・五能線は、青森市～本圏域～秋田方面を結ぶ重要な輸送幹線であるため、長年にわたり機能強化や利便性・快適性の向上を要望しており、令和2年12月から五能線の全ての列車と奥羽本線の一部列車に新型車両が導入されているほか、令和5年から奥羽本線（青森駅から弘前駅）において交通系 IC カード Suica の利用が可能となる動きがありますが、利便性・快適性のさらなる向上が求められています。

また、平成28年3月には北海道新幹線が開業し、本県と道南地域が最速57分で結ばれるなど、道南のみならず首都圏からの時間短縮により、訪日外国人を含めた観光やビジネス等、様々な分野での交流人口の拡大が期待されていることから二次交通の充実が強く求められておりますが、JR 奥羽本線・五能線は、強風や豪雪によるダイヤの乱れが多く、新幹線へのアクセス等の利便性・快適性向上や安定輸送の確保を求める声があります。

このことから、JR 両線の災害に備えた機能向上、スムーズな乗り継ぎの確保などを図るために、その実現手法の検討や利用意識の醸成に向けて、地域と JR が連携して取り組んでいく必要があります。

弘南鉄道は、圏域中心都市である弘前市とのアクセス手段に大きな役割を果たしていますが、モータリゼーションや少子化の進展、人口減少に伴い、利用者が減少していることから、ほかの公共交通機関との連携による利便性向上や地域と協働した利用意識の醸成に取り組んでいく必要があります。

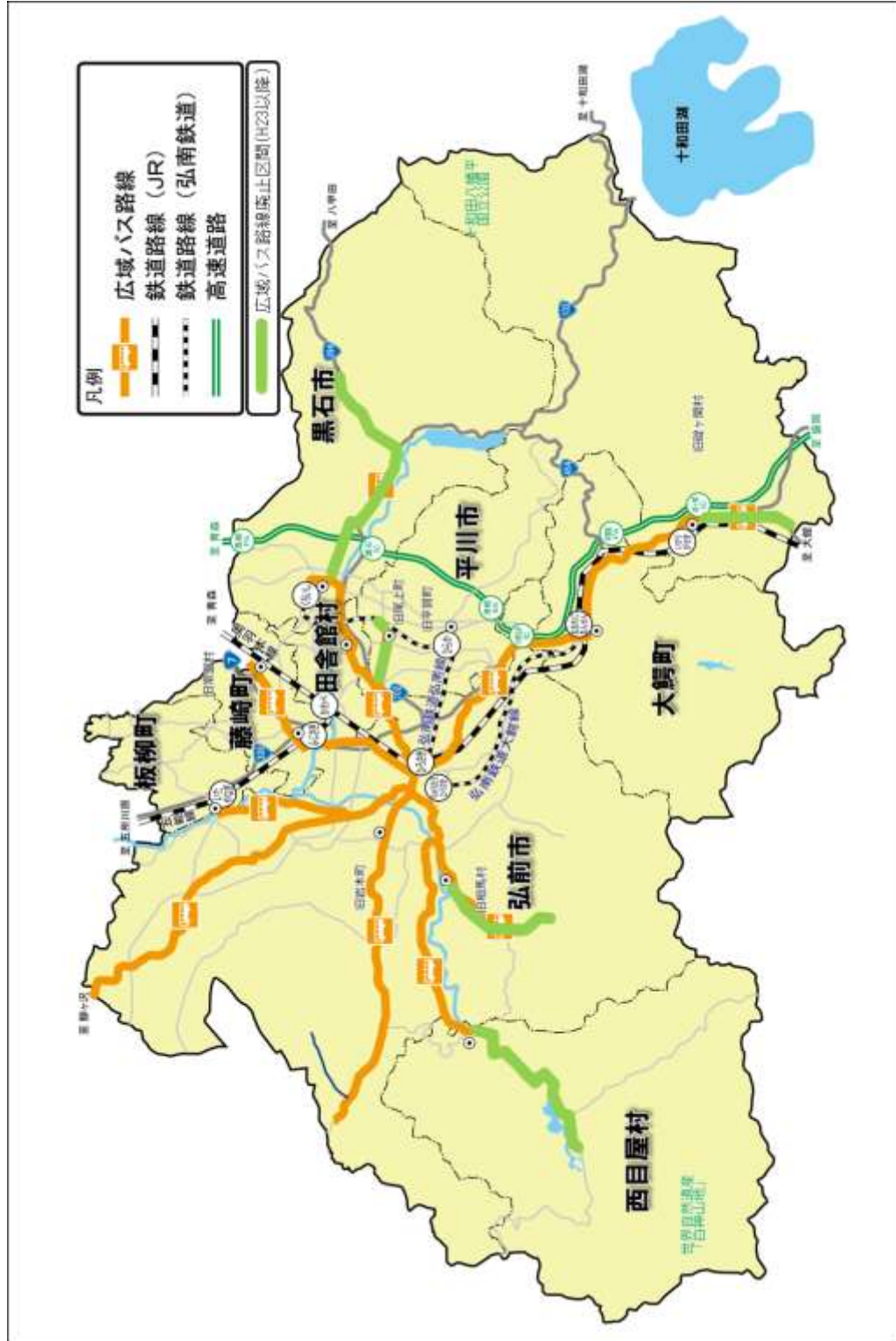
#### ■ バス

圏域内のバス路線については、圏域内の大部分を弘南バスがカバーしております。

圏域内における路線バス利用者は、モータリゼーションや少子化の進展、人口減少に伴い、長期にわたって減少が続いており、現状の公共交通体系を維持することが困難となっております。

このため、交通弱者の生活交通の確保のほか、まちづくりと連携した持続可能で効果的かつ効率的な圏域内公共交通網の再構築や利用促進に向けて、公共交通事業者と連携し取り組んでいく必要があります。

図 圏域内の公共交通網



(作成：弘前市地域交通課 令和3年4月1日現在)

(2) 移住・定住

■ 婚活支援

近年、急速な少子高齢化が全国的に進行する中、平均初婚年齢および平均出生時年齢が年々上昇し、1人の女性が生涯に生む子供の数が減少する一方、生涯未婚率が上昇し、人口減少は今後ますます加速していくものと推計されています。

未婚化・晩婚化の背景には、若年層の結婚観やコミュニケーションのあり方の変化、また経済・雇用面の課題等が複合的に絡み合っているとされていますが、その一つに、以前は職場や地域が果たしてきた異性との出会いの場としての機能が薄れたことにより、結婚意欲はあるものの出会いの機会に乏しい独身男女が増加しているため、地域全体で支援する体制の整備が求められています。

具体的には、弘前圏域住民を対象にお見合い支援を行う「ひろさき広域出愛サポートセンター」の運営や、出会いの場を提供するイベントの開催など、スケールメリットを活かした効果的な婚活支援を圏域全体で展開し、より多様な出会いの場を創出して成婚の促進及び定住人口の増加を図る必要があります。

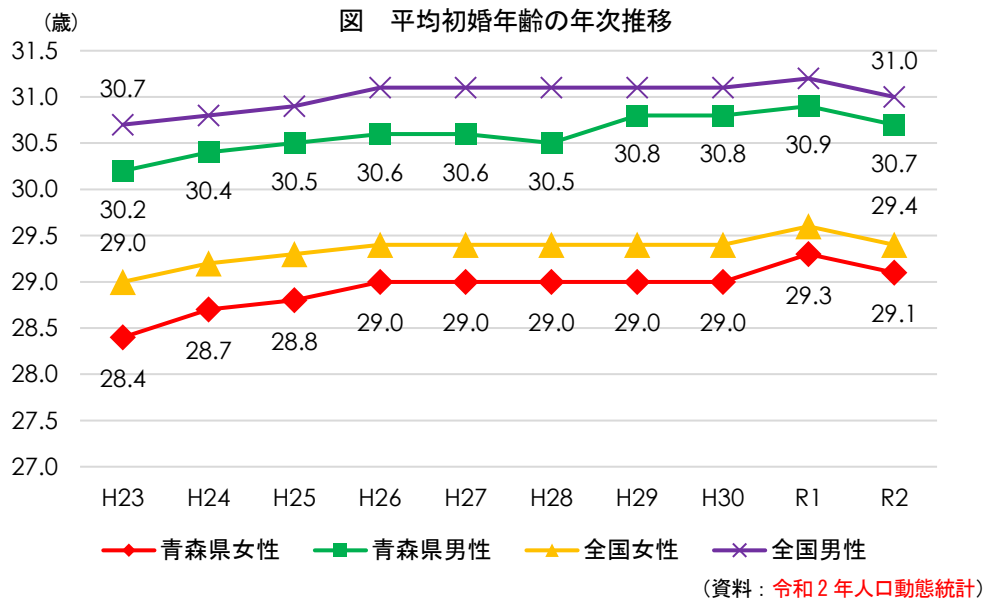


表 婚姻件数及び婚姻率 (人口千人当たりの婚姻件数)

	平成26年		令和元年	
	婚姻件数(件)	婚姻率	婚姻件数(件)	婚姻率
弘前市	769	4.3	657	3.9
黒石市	120	3.5	96	3.0
平川市	122	3.7	95	3.1
藤崎町	63	4.1	51	3.5
板柳町	52	3.6	39	3.0
大鰐町	25	2.5	25	2.9
田舎館村	28	3.5	24	3.2
西目屋村	2	1.3	-	-
圏域計	1,181	4.0	987	3.5

(資料: 令和元年青森県保健統計年報)

### ■ 移住・定住の促進

全国的な人口減少社会を迎え、圏域市町村においても人口減少が課題となっています。こうした中、圏域市町村への移住相談者の中には弘前圏域を対象に移住先を検討している方も多く、圏域全体での連携した取組の必要性が高まっています。

また、新型コロナウイルス感染症の流行をきっかけに、地方への回帰志向の高まりが見られてきていることから、移住を検討している人への積極的なアプローチが求められています。

全国の多くの市町村が移住対策に取り組む中で、圏域外からの移住を促進するため、圏域市町村が連携して、移住者を受け入れる態勢を構築するとともに、圏域の魅力や優位性等を一体となってPRし、移住・定住に繋げていく必要があります。

## 8 地域づくりを担う人材育成

### (1) 住民活動及び協働

少子高齢化が進行する中で、防災・防犯や雪対策など地域が抱える課題に対する行政主導体制の限界や、厳しい財政下における住民ニーズの多様化・複雑化・拡大化などを背景に、地域住民相互の協力や、地域と行政が役割や機能を分担しながら、協働して課題解決へ取り組むことが強く求められています。

こうした状況の中で、地域における生活上の様々な共通課題について、地域住民自らが、相互に協力しあい、連帯して解決していこうとする活動が出てきています。このような地域づくりの動きは、町会や自治会のコミュニティ組織だけではなく、自主活動グループ・NPO（民間非営利組織）やサークルなどの活動を通じて、生活・生産・教育・文化・芸術活動などあらゆる分野に及び、コミュニティビジネスへの展開もみられます。また、町会については、これまで、地域の自治意識のかん養のみならず、行政運営の一翼を担っており、行政と住民のコミュニケーションを円滑にするパイプ役として大きな役割を果たしてきました。

しかしながら、近年は、少子高齢化・核家族化に加え、住民活動の多様化・広域化などにより、地域住民同士のつながりも希薄になっていることから、住民の地元行事などへの参加がなかなか進まない状況にあります。このことから、町会やボランティア、NPO活動などへの理解と参加を促進するため、社会参加がしやすい環境の整備を図ることが課題となっています。

住民との協働によるまちづくりを推進していくためには、住民との対話や情報の共有化により、住民の行政への参加意識の高揚を図り、地域活動、コミュニティ活動を推進するための取り組みが必要です。

さらに、これを実現するためには、行政職員の意識改革や地域の人材の発掘や育成が重要であり、地域のさまざまな課題解決を図るためには、関係する広域での取組を視野に入れた人材の育成とそのネットワーク化による効果的な取り組みを工夫する必要があります。

## 第Ⅲ章 圏域の将来像

急速な人口減少、少子化、高齢化など、極めて厳しい未来が圏域に訪れようとしています。

千年に一度の大災害といわれている東日本大震災、また、世界規模での流行が見られた新型コロナウイルス感染症は、これからの国の在り方、地域の在り方、そして私たちの生活の在り方を改めて見つめ直す転換点をもたらしました。

世界自然遺産白神山地、秀峰岩木山は、清らかな“水”を運び、美しい山々の懷に抱かれた津軽平野は、肥沃な“大地”をひろげています。

四季の魅力あふれる気候・風土は、豊かな“人材”を育み、先人たちの英知と努力により、この地に重厚な歴史と、優れた伝統、文化を築き上げました。

津軽の地で培われた豊かな財産は、今もなお地域の発展を支え、導き、私たちと共に生き続けています。

苦難を乗り越え、突き付けられた課題を解決するためのフィールドが白神の恵みを受けたこの地なのです。

先人が残した財産をさらに磨き上げ、かけがえのない故郷を一人一人がしっかりと受け継ぎ、愛と誇りをもって、次の世代へ着実に引き継ぐことが私たちの使命です。

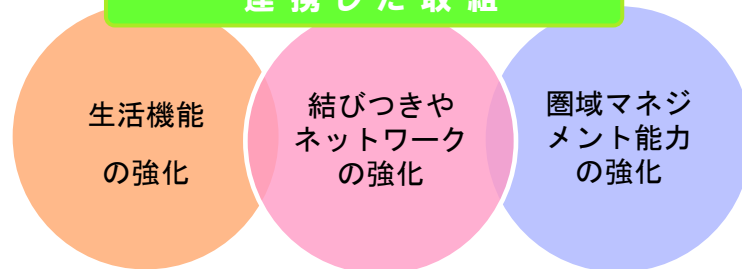
私たちの未来は与えられたものではなく、私たちが創り出していくものです。

- ・ 再生可能エネルギーの利用をすすめ、美しく豊かな自然と水を守り、りんごをはじめとする農産物の価値を高め、自然災害や社会経済情勢などの外部環境の変化に惑わされない圏域の形成を目指します。
- ・ 産学官金の連携をさらに強め、研究機関や実証実験施設の誘致を行い、産業の育成を目指します。
- ・ 魅力あふれる観光都市や、世界遺産を携える地域などとの重層的な連携を目指します。
- ・ 働きながらも、安心して子どもを産み、子どもとのふれあいを大切に育てられる環境づくりを目指します。
- ・ 高齢者が持つ豊かな知識と経験を活かし、生涯現役で活躍できる社会を目指します。
- ・ 人口減少に汲々<sup>きゅうきゅう</sup>とせず、それを受け止めながら、魅力あふれるまちづくりを目指します。
- ・ 教育や文化の厚みを背景に、物質的な豊かさにとらわれない幸せと生きがいを感じる、新たなライフスタイルを創り出していきます。

## 弘前圏域の将来像

- 地域資源を活かした外部環境の変化に惑わされない圏域の形成
- 産学官金連携の強化と研究機関等の誘致による産業の育成
- 魅力あふれる観光都市や世界遺産を携える地域との連携
- 働きながらでも安心して子どもを産み育てられる環境づくり
- 高齢者が生涯現役で活躍できる社会
- 人口減少に<sup>きゅうきゅう</sup>汲々<sup>きゅうきゅう</sup>としない魅力あふれるまちづくり
- 物質的な豊かさにとらわれない新たなライフスタイルの創出

### 連携した取組



#### ◆ 弘前圏域の将来像を実現するために

定住自立圏全体の活性化を通じて人口定住を図るという観点から、さまざまな具体的取組についての連携を目指します。

特に、「集約とネットワーク」の考え方を基本として、以下の3つの視点から、人口定住のために必要な生活機能を確保していきます。

生活機能の強化	結びつきやネットワークの強化	圏域マネジメント能力の強化
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 医療 ・ 福祉 ・ 教育</li> <li>• 土地利用 ・ 産業振興</li> </ul> このほか、ごみ処理、し尿処理など従来から連携してきた取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 地域公共交通</li> <li>• ICT インフラの整備</li> <li>• 交通インフラの整備</li> <li>• 交流・移住促進</li> </ul> など	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 人事交流</li> <li>• 人材の確保</li> <li>• 人材の育成</li> </ul> など

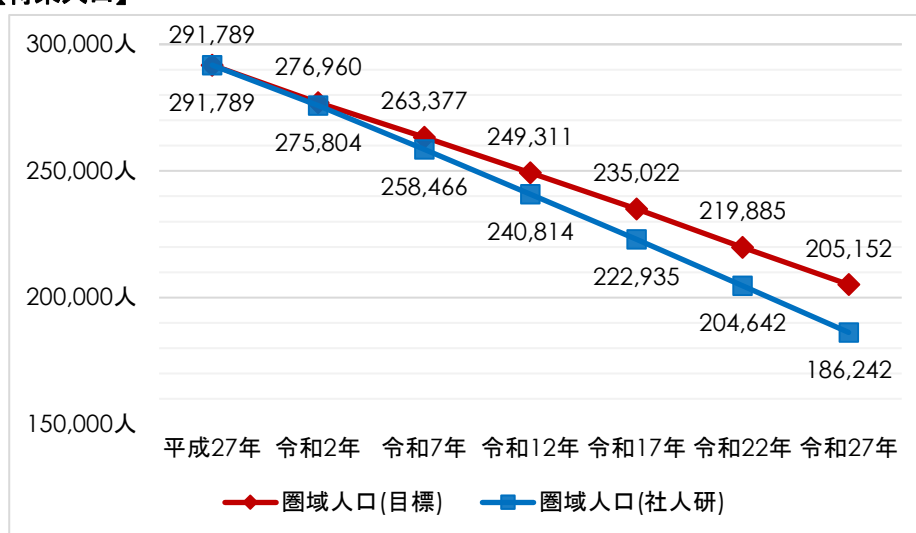
◆ 圏域の将来人口

弘前圏域の総人口は、平成30年3月に公表された国立社会保障・人口問題研究所（以下、社人研）の推計結果によると、令和27年には186,242人になるとされています。

弘前圏域では、本共生ビジョンにおける協定に基づき推進する具体的取組の実施により、定住自立圏全体の活性化を通じて人口定住を図るとともに、各市町村における「まち・ひと・しごと創生総合戦略」に基づく各種施策を継続的に実施することにより、人口減少のスピードを緩和し、令和27年の弘前圏域における総人口は、社人研の将来推計人口と比較し18,910人（10.2%）増加の205,152人を目標とします。

また、婚活支援や子育て支援、雇用環境の改善に連携して取り組み、令和27年には、15歳未満である年少人口の割合を社人研が推計する8.4%から2.3ポイント増加させ、10.7%を目標とします。

【将来人口】



(単位：人)

		平成27年	令和2年	令和7年	令和12年	令和17年	令和22年	令和27年
弘前市	社人研	177,411	168,564	160,705	151,287	141,559	131,389	120,920
	目標	177,411	169,667	162,777	155,056	146,573	137,144	127,702
黒石市	社人研	34,284	31,972	29,741	27,468	25,111	22,704	20,340
	目標	34,284	32,459	30,717	28,944	27,086	25,139	23,238
平川市	社人研	32,106	30,621	28,238	26,245	24,259	22,213	20,154
	目標	32,106	30,357	28,828	27,461	26,267	25,190	24,051
藤崎町	社人研	15,179	14,578	13,400	12,460	11,502	10,519	9,522
	目標	15,179	14,330	13,508	12,664	12,110	11,528	10,950
板柳町	社人研	13,935	12,712	11,214	9,917	8,691	7,521	6,428
	目標	13,935	12,543	11,240	10,030	8,898	7,820	7,078
大鰐町	社人研	9,676	8,671	7,292	6,225	5,274	4,417	3,649
	目標	9,676	8,791	7,965	7,224	6,543	5,892	5,304
田舎館村	社人研	7,783	7,328	6,788	6,259	5,712	5,162	4,618
	目標	7,783	7,437	7,098	6,790	6,486	6,184	5,911
西目屋村	社人研	1,415	1,265	1,088	953	827	717	611
	目標	1,415	1,376	1,244	1,142	1,059	988	918
圏域合計	社人研	291,789	275,711	258,466	240,814	222,935	204,642	186,242
	目標	291,789	276,960	263,377	249,311	235,022	219,885	205,152

平成27年：国勢調査

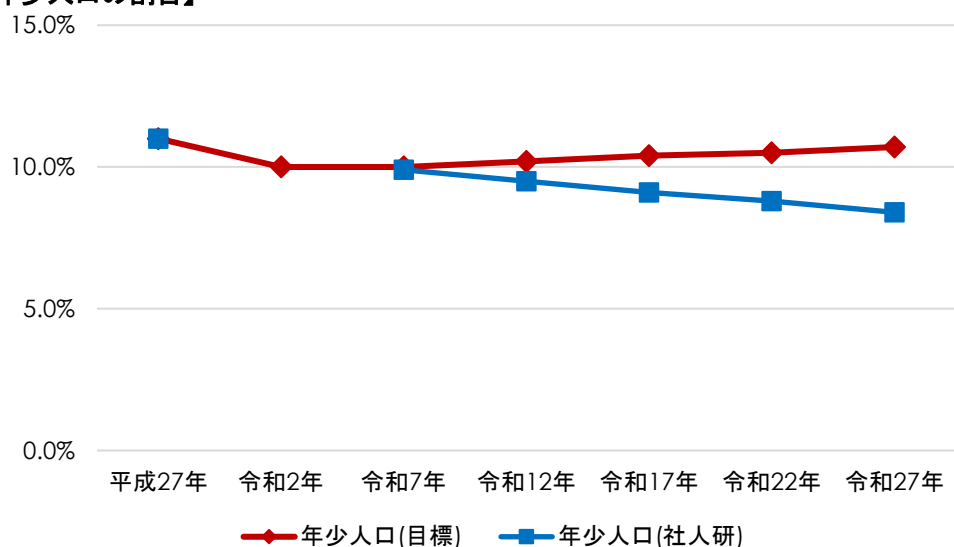
令和2年以降：社人研；国立社会保障・人口問題研究所「日本の市区町村別将来推計人口」（平成30年3月推計）

※令和2年のみ国勢調査

目標：各市町村人口ビジョン



【年少人口の割合】



		平成 27 年	令和 2 年	令和 7 年	令和 12 年	令和 17 年	令和 22 年	令和 27 年
弘前市	社人研	11.0%	●●%	9.8%	9.4%	9.0%	8.7%	8.4%
	目 標	11.0%	10.3%	9.9%	9.6%	9.4%	9.1%	8.8%
黒石市	社人研	11.3%	●●%	10.2%	9.7%	9.2%	8.9%	8.6%
	目 標	11.3%	9.7%	10.0%	10.3%	10.4%	10.2%	10.0%
平川市	社人研	11.3%	●●%	10.7%	10.3%	10.0%	9.7%	9.5%
	目 標	11.3%	10.6%	11.0%	11.7%	12.3%	13.1%	13.8%
藤崎町	社人研	11.9%	●●%	11.2%	10.9%	10.4%	10.1%	9.6%
	目 標	11.9%	11.5%	11.9%	12.3%	12.8%	12.9%	13.5%
板柳町	社人研	10.7%	●●%	9.2%	8.4%	7.6%	7.0%	6.5%
	目 標	10.7%	9.8%	9.4%	9.4%	10.0%	10.2%	9.9%
大鰐町	社人研	8.1%	●●%	6.1%	5.5%	5.0%	4.6%	4.3%
	目 標	8.1%	7.2%	7.5%	8.5%	9.0%	9.0%	8.7%
田舎館村	社人研	11.4%	●●%	11.0%	10.4%	9.8%	9.2%	8.7%
	目 標	11.4%	11.1%	11.3%	12.4%	13.4%	14.1%	14.6%
西目屋村	社人研	9.1%	●●%	8.9%	7.3%	7.0%	6.7%	6.2%
	目 標	9.1%	8.5%	9.8%	9.9%	10.6%	11.4%	11.8%
圏域合計	社人研	11.0%	●●%	9.9%	9.5%	9.1%	8.8%	8.4%
	目 標	11.0%	10.0%	10.0%	10.2%	10.4%	10.5%	10.7%

平成 27 年：国勢調査(年齢不詳分は除く)

令和 2 年以降：社人研；国立社会保障・人口問題研究所「日本の市区町村別将来推計人口」(平成 30 年 3 月推計)

※令和 2 年のみ国勢調査

目 標；各市町村人口ビジョン

年少人口の割合…総人口(年齢不詳分は除く)に占める 0~14 歳の人口の割合

## 第IV章 協定に基づき推進する具体的取組

連携施策（協定項目）

協定に基づく具体的取組

### 1 生活機能の強化

医 療	救急医療体制の維持及び充実	○休日及び夜間における <b>初期</b> 救急診療事業
		○休日及び夜間における <b>第二次</b> 救急診療事業
福 祉	子育て支援の充実	○特別保育事業
	成年後見制度の広域対応	○弘前圏域権利擁護支援事業
教 育	大石武学流庭園の調査、普及及び活用	○ <b>大石武学流庭園活用事業</b>
	重要伝統的建造物群保存地区における修理修景等事業及び活用事業の推進	○重要伝統的建造物群保存地区修理修景等及び活用事業
産業振興	食産業の育成	○農商工連携・6次産業化促進事業
	企業誘致活動の推進	○企業誘致圏域連携事業
	農作物猿害防止体制の構築	○農作物猿害防止対策事業
観光振興	広域観光商品の充実	○広域観光商品化情報発信事業
地域防災	広域備蓄体制の整備	○ <b>災害時に向けた備蓄体制の整備・強化</b>
	合同防災訓練等の実施	○ <b>防災訓練の内容強化</b>
環 境	し尿処理の広域化	○し尿・浄化槽汚泥等共同処理事業
	カラス対策の連携	○カラス対策連携事業
	使用済小型家電リサイクルの促進	○使用済小型家電リサイクル事業
土地利用	空き家・空き地の利活用の促進	○空き家・空き地バンク連携事業
その他	消費生活相談体制の広域的対応	○弘前圏域消費生活相談事業

## 2 結びつきやネットワークの強化

地域公共交通	圏域公共交通ネットワークの再構築及び利用促進	○公共交通ネットワークの再構築及び利用促進活動の実施
地域内外の住民との交流・移住促進	婚活支援の推進	○婚活支援事業
	移住・定住の促進	○弘前圏域移住・交流推進事業

## 3 圏域マネジメント能力の強化

圏域市町村の職員等の交流	圏域市町村職員の育成	○圏域職員合同研修事業
行政事務の効率化	電算システムの共同利用	○電算システム共同利用推進事業

1 生活機能の強化に係る具体的取組

(1) 医療

政策分野における	指 標	現状値（調査時点）	目標値（達成年度）
基本目標	休日・夜間救急診療体制 対応日数	365 日（令和2年度）	365 日（令和8年度）

定住自立圏形成協定の規定内容	
取組の名称	救急医療体制の維持及び充実
取組の内容	圏域の救急医療体制を確保するため、休日・夜間救急診療体制を維持するとともにその充実を図る。
中心市（甲） の役割	甲が行う休日・夜間急患診療体制及び休日在宅医診療体制を維持する。
周辺市町村（乙） の役割	甲が維持する休日・夜間急患診療体制及び休日在宅医診療体制を支援するとともに、必要に応じ経費を負担する。

事業名	休日及び夜間における初期救急診療事業					
関係市町村	弘前市、黒石市、平川市、藤崎町、板柳町、大鰐町、田舎館村、西目屋村					
現状と課題	圏域における救急医療施設及び機能は、弘前市に集中している状況にあり、救急医療については、弘前市の施設並びに黒石市の一部施設を利用せざるを得ない状況にある。圏域住民への救急医療体制を維持するため、休日及び夜間における初期救急については、弘前市が設置、運営している急患診療所及び休日在宅医診療事業を維持継続する必要がある。					
事業内容	弘前市が弘前市医師会、歯科医師会に指定管理及び委託して実施する休日・夜間急患診療体制(弘前市急患診療所)、休日在宅医診療体制を維持するとともに、その充実を図る。					
効 果	圏域における救急医療体制を連携強化することで、圏域住民が安心して暮らしていくための医療サービスを提供することができる。					
重要業績評価指標 (K P I)	指 標		現状値（調査時点）		目標値（達成年度）	
	弘前市急患診療所の運営		365 日（令和2年度）		365 日（令和8年度）	
	休日在宅医診療の実施		実施（令和2年度）		継続実施（令和8年度）	
スケジュール	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	合計
急患診療所の運営	→		→		→	
休日在宅医診療	→		→		→	
事業費見込額 (千円)	111,223	111,223	111,223	111,223	111,223	556,115
特定財源等	病診連携等による地域医療の確保に対する財政措置(特別交付税)					

事業名	休日及び夜間における <b>第二次救急診療事業</b>					
関係市町村	弘前市、黒石市、平川市、藤崎町、板柳町、大鰐町、田舎館村、西目屋村					
現状と課題	<p>圏域における救急医療施設及び機能は、弘前市に集中しており、多くの圏域市町村民は、<b>第二次救急医療</b>においても弘前市内の病院医療施設を利用している状況である。</p> <p>また近年、医師の高齢化等で輪番当直を行う医師不足のほか、輪番制に参加する病院数が減少するなど、病院群輪番制の維持が困難な状況になっていたことから、<b>圏域の第二次救急医療体制を再構築するため、青森県地域医療構想において中核病院整備の方針が示され、国立病院機構弘前病院と弘前市立病院の機能の集約・統合による新中核病院「弘前総合医療センター（仮称）」が整備され、令和4年4月1日に運営が開始される。</b></p> <p>弘前総合医療センター（仮称）の整備により、圏域の第二次救急医療体制は強化されることとなるが、運営開始直後は十分な医師の確保が見込まれないほか、災害や感染症対応を踏まえ、休日及び夜間における第二次救急医療体制の維持には、弘前大学医学部附属病院高度救命救急センターをはじめとした、他の医療機関による協力が必要不可欠な状況となっている。また、弘前大学大学院医学研究科に開設している「地域救急医療学講座」を継続し、圏域の救急医療を担う人材の確保・育成により、体制の維持・充実を図る必要がある。</p>					
事業内容	圏域の休日及び夜間の第二次救急医療提供体制を維持するため、新中核病院及び休日及び夜間の第二次救急対応病院の体制維持を支援する。併せて、第二次救急医療体制の充実を図るため、弘前大学大学院医学研究科に設置している寄附講座「地域救急医療学講座」の開設を延長する。					
効果	圏域における <b>第二次救急医療提供体制の維持・充実を図ること</b> 及び救急医療体制の連携強化により、圏域住民が安心して暮らしていくための医療サービスを、長期にわたり安定して提供することができる。					
重要業績評価指標 (KPI)	指 標		現状値（調査時点）		目標値（達成年度）	
	二次救急医療提供体制の維持		365日（令和2年度）		365日（令和8年度）	
スケジュール	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	合計
第二次救急医療体制確保支援						
寄附講座「地域救急医療学講座」の開設						
新中核病院運営費交付金						
事業費見込額 (千円)	289,542	289,542	289,542	289,542	289,542	1,447,710
特定財源等	病診連携等による地域医療の確保に対する財政措置(特別交付税)					


(2) 福祉

政策分野における 基本目標	指 標	現状値 (調査時点)	目標値 (達成年度)
	延べ利用児童数	28,248 人 (令和元年度)	30,000 人 (令和8年度)
	権利擁護に係る相談件数※ <sup>1</sup>	416 件 (令和2年度)	540 件 (令和8年度)

※<sup>1</sup> 圏域内のみの相談数をカウント

①子育て支援の充実

定住自立圏形成協定の規定内容	
取組の名称	子育て支援の充実
取組の内容	圏域の住民の子育て支援の充実を図るため、甲が行う特別保育事業の対象区域を圏域に拡大し、圏域全体として安心して子育てができる環境を整備する。
中心市 (甲) の役割	特別保育事業の対象区域を拡大し、圏域住民の利用に供する。
周辺市町村 (乙) の役割	甲が行う特別保育事業を区域内の住民に周知し、積極的な活用を促進する。

事業名	特別保育事業					
関係市町村	弘前市、黒石市、平川市、藤崎町、板柳町、大鰐町、田舎館村、西目屋村					
現状と課題	生活圏の広域化に伴い、周辺市町村から弘前市に通勤する地域住民が増えてきており、弘前市内の勤務先の近くで子育て支援を受ける機会の拡充が求められている。このため、現在、圏域では保育所の広域入所が実施されている。また、平成27年度からは、保育所のほか、認定こども園へ移行した施設や幼稚園での預かり保育も事業の対象としている。					
事業内容	弘前市が実施している下記の事業について、関係市町村の住民に対象を拡大した子育て支援策を実施する。 1) 一時預かり事業 (利用児童以外の一時的な保育サービス) 2) 休日保育事業 (日曜・祝日に係る児童の保育サービス) 3) 地域子育て支援拠点事業 (子育て親子の交流、子育てに関する相談・援助、子育て関連情報の提供、子育てに関する講習等)					
効 果	ライフスタイルに応じた子育て支援サービスの選択肢が増えることで、安心して子育てができる環境の充実につながる。					
重要業績評価指標 (KPI)	指 標		現状値 (調査時点)		目標値 (達成年度)	
	一時預かり事業・休日保育事業・地域子育て支援拠点事業延べ実施施設数		73 施設 (令和2年度)		82 施設 (令和8年度)	
スケジュール	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	合 計
特別保育事業の実施						
事業費見込額 (千円)	180,412	180,412	180,412	180,412	180,412	902,060
特定財源等	子ども・子育て支援交付金 (国) 地域子ども・子育て支援事業費補助金 (県)					

②成年後見制度の広域対応

定住自立圏形成協定の規定内容	
取組の名称	成年後見制度の広域対応
取組の内容	圏域における成年後見制度を含めた権利擁護の支援に関する業務を広域的に行うことにより、住民サービスの向上を図る。
中心市（甲）の役割	圏域の権利擁護の支援に関する業務を行うため、弘前圏域権利擁護支援センターを拠点に、権利擁護に関する取組を中心的に行うとともに、必要な経費を負担する。
周辺市町村（乙）の役割	甲と連携して権利擁護に関する取組を行うとともに、必要な経費を負担する。

事業名	弘前圏域権利擁護支援事業					
関係市町村	弘前市、黒石市、平川市、藤崎町、板柳町、大鰐町、田舎館村、西目屋村					
現状と課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国が求める中核機関として令和2年度から弘前圏域権利擁護支援センターを開設、運営し、成年後見制度の相談支援や広報啓発等を行っている。</li> <li>・成年後見制度の利用者は毎年増加するとともに、親族以外の第三者が後見人等になる場合が増加し、全国的にも受任者が不足傾向にある。</li> <li>・市民後見人等候補者名簿には、令和3年4月1日現在30人の登録があり、既に2人が裁判所からの審判を受け、市民後見人として活動している。</li> <li>・引き続き、圏域市町村全体で相談体制を構築していくとともに、担い手の育成に取り組んでいく必要がある。</li> </ul>					
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・弘前圏域権利擁護支援センターを運営し、関係機関との連携強化を図りながら、相談支援、市民後見人の養成やその活動支援などの権利擁護に係る体制を構築する。</li> <li>・権利擁護に関する制度活用のための情報交換、及び関係機関の連携に関することなどの協議の場である弘前圏域権利擁護支援連絡会を設置する。</li> </ul>					
効果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・圏域市町村が単独で権利擁護支援センターを設置するよりも経費の負担が軽減され、専門の相談員が確保される。</li> <li>・市民後見人等候補者が確保される。</li> <li>・権利擁護支援センターの設置・権利擁護支援連絡会の開催により、家庭裁判所及び関係機関との効率的・効果的な連携が図られる。</li> </ul>					
重要業績評価指標（KPI）	指 標		現状値（調査時点）		目標値（達成年度）	
	圏域内における市民後見人養成研修受講者数		30人（令和2年度）		75人（令和8年度）	
スケジュール	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	合 計
弘前圏域権利擁護支援センターの運営						
事業費見込額（千円）	8,984	8,338	8,984	8,338	8,984	43,628
特定財源等	生活困窮者就労準備支援事業費等補助金、青森県介護従事者確保対策事業費補助金					


(3) 教育

政策分野における	指 標	現状値 (調査時点)	目標値 (達成年度)
基本目標	観光客入込数※ <sup>3</sup>	70,122 人 (令和元年度)	82,000 人 (令和8年度)

※<sup>3</sup> 構成市町村の文化財庭園及び重伝建地区への観光客入込数

①大石武学流庭園の調査、普及及び活用

定住自立圏形成協定の規定内容	
取組の名称	大石武学流庭園の調査、普及及び活用
取組の内容	圏域内の指定名勝及び登録記念物の庭園を核として、大石武学流庭園の掘り起こしを行い、津軽独自の庭園文化の普及及び活用を図る。
中心市 (甲) の役割	大石武学流庭園の調査、普及及び活用に取り組むとともに、必要な経費を負担する。
周辺市町村 (乙) の役割	甲と連携して大石武学流庭園の調査、普及及び活用に取り組むとともに、必要な経費を負担する。

事業名	大石武学流庭園活用事業					
関係市町村	弘前市、黒石市、平川市					
現状と課題	津軽地方で独自に発展・広がりを見せた大石武学流庭園は、全国的に見ても非常に地域性豊かな庭園文化として、国内外から高い評価を受けている。 しかしながら、独自の流派として継承されてきた大石武学流庭園の文化財的価値は高いものの、その価値の理解は一部の市民・観光客の間に留まっている。 さらに、現在、圏域内に残っている庭園のほとんどは、個人所有となっており、生活様式の変化や少子高齢化などにより、庭園の改変・取り壊しが見られるなど、庭園そのものの存続が危ぶまれる状態にある。					
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>圏域独自の庭園のブランド戦略を図り、観光コンテンツとしての磨き上げを行う。</li> <li>圏域ブランドとして庭園文化を国内外に発信する。</li> </ul>					
効 果	庭園の適正な保存・継承に繋がるとともに、市民・観光客に対して、庭園の価値を広く周知することが可能になり、さらには、観光資源として活用することで、圏域への誘客も期待できる。					
重要業績評価指標 (K P I)	指 標		現状値 (調査時点)		目標値 (達成年度)	
	公開文化財庭園入園者数		21,567 人 (令和元年度)		23,000 人 (令和8年度)	
スケジュール	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	合 計
情報発信						
事業費見込額 (千円)	7,322	600	600	600	600	9,722
特定財源等	無し					



②重要伝統的建造物群保存地区における修理修景等事業及び活用事業の推進

定住自立圏形成協定の規定内容	
取組の名称	重要伝統的建造物群保存地区（以下「重伝建地区」という。）における修理修景等事業及び活用事業の推進
取組の内容	圏域内で甲乙に所在する両重伝建地区に対する愛情・誇り・一体感を醸成し、圏域外からの観光客の流入と周遊を図るため、修理修景等事業の推進及び圏域内外への情報発信等の広報活動に取り組む。
中心市（甲）の役割	甲に所在する重伝建地区内の修理修景等事業を推進する。また、圏域内外への両重伝建地区の情報発信等の広報活動に取り組むとともに、必要な経費を負担する。
周辺市町村（乙）の役割	乙に所在する重伝建地区内の修理修景等事業を推進する。また、甲と連携し圏域内外への両重伝建地区の情報発信等の広報活動に取り組むとともに、必要な経費を負担する。

事業名	重要伝統的建造物群保存地区修理修景等及び活用事業					
関係市町村	弘前市、黒石市					
現状と課題	地区住民の協力のもと、良好な景観が維持されており、さらには、その良好な景観を観光資源の1つとして観光面に活用している。 しかしながら、社会環境や生活様式の変化に伴う改修を求める事例の発生や、少子高齢化による空き家の増加などにより、年々景観の保全が困難になってきている。					
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・圏域に所在する重要伝統的建造物群保存地区の景観の保全に資する修理修景事業を推進するため、補助金を交付する。</li> <li>・既存パンフレットの相互交換を行うなど、情報発信に努める。</li> <li>・保護意識を醸成するとともに、地区への理解を図るため、見学会や研修会を開催する。</li> </ul>					
効果	良好な景観を維持することで、地区住民の保護意識や愛着心の醸成が図られるとともに、観光資源として活用することで、圏域への誘客も期待できる。					
重要業績評価指標（KPI）	指 標		現状値（調査時点）		目標値（達成年度）	
	公開施設の観光客入込数		48,555人（令和元年度）		59,000人（令和8年度）	
スケジュール	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	合計
修理修景						
情報発信						
事業費見込額（千円）	8,300	8,300	8,300	8,300	8,300	41,500
特定財源等	伝統的建造物群保存事業費補助金					

(4) 産業振興

政策分野における	指 標	現状値 (調査時点)	目標値 (達成年度)
基本目標	商談成約件数	43 件 (令和元年度)	48 件 (令和8年度)
	企業誘致件数(累計)	1 件 (令和2年度)	12 件 (令和4~8年度)
	ニホンザルによる農作物への被害金額	9,164 千円 (令和2年度)	7,300 千円 (令和8年度)

① 食産業の育成

定住自立圏形成協定の規定内容	
取組の名称	食産業の育成
取組の内容	圏域の豊富な農産資源等を活用した付加価値の高い商品づくりや販路開拓に取り組む事業者を支援するための体制を整備する。
中心市(甲)の役割	商品開発へのアドバイスや事業者のマッチング等を行う人材を確保するとともに、商品開発等に取り組む事業者の発掘や販路開拓のための取組を中心的に行う。
周辺市町村(乙)の役割	甲と連携して商品開発等に取り組む事業者の発掘や販路開拓のための取組を行う。

事業名	農商工連携・6次産業化促進事業					
関係市町村	弘前市、黒石市、平川市、藤崎町、板柳町、大鰐町、田舎館村、西目屋村					
現状と課題	圏域はりんごを始めとした豊富な農産資源を有する地域であり、ジュースや製菓等に加工した商品が流通しているものの、販売先は周辺市町村に限定された小規模市場が主となり、首都圏や西日本等への販路開拓が課題となっている。					
事業内容	地元農産物や加工品の販路拡大を支援するため、各業界のバイヤーが多数来場する展示商談会に出展し、商談の機会を提供する。					
効 果	新たな市場を開拓することで、競争力の高い企業が育成され、雇用創出も期待できる。また、販路拡大による商品生産量の増産は、加工用原料を生産する農家の所得向上も期待できる。					
重要業績評価指標 (KPI)	指 標		現状値 (調査時点)		目標値 (達成年度)	
	展示商談会での商談件数		354 件 (令和元年度)		400 件 (令和8年度)	
スケジュール	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	合 計
見本市への出展	→					
事業費見込額 (千円)	3,734	3,734	3,734	3,734	3,734	18,670
特定財源等	無し					

② 企業誘致活動の推進

定住自立圏形成協定の規定内容	
取組の名称	企業誘致活動の推進
取組の内容	地域の雇用確保及び経済の活性化を図るため、圏域市町村と立地に係る情報を共有し、圏域全体としての立地環境、魅力や強みを企業へ情報発信するなど、圏域一体となった企業誘致活動を展開する。
中心市（甲）の役割	企業立地に係る圏域の情報を集約するとともに、圏域一体としての情報発信及び企業誘致のための取組を中心的に行う。
周辺市町村（乙）の役割	企業立地に係る情報を甲に提供するとともに、甲と連携して情報発信及び企業誘致のための取組を行う。

事業名	企業誘致圏域連携事業					
関係市町村	弘前市、黒石市、平川市、藤崎町、板柳町、大鰐町、田舎館村、西目屋村					
現状と課題	工場等の立地について、海外展開の動きが一段落し、生産の国内回帰の動きが広がっているものの、統合・集約による立地が多く、本社所在地から離れた地方への企業立地は厳しい状況にある。 一方で、国内情報サービス関連企業は、大都市圏における人材確保の困難さに加え、新型コロナウイルス感染症拡大に伴って働き方などを見直す気運が高まっており、大都市でのリスクを分散するため、これまで以上に地方都市への進出に目を向けている状況にある。 そのため、今後の需要動向を捉えながら、産業立地が可能な地域の拡大等を図る必要がある。					
事業内容	各市町村の空き物件に関する情報交換を随時行い、立地場所としての選択肢を広げることで、進出検討企業のニーズに幅広く対応していく。 加えて、立地環境や事業者のニーズに応じた優遇制度の整備を各市町村で実施し、これらの積極的なPRを進めていく。 PRの場のひとつとして、青森県が主催または出展しているフェア等へ参加し、連携しながら情報発信を行う。					
効果	雇用の機会が増えるとともに、就労人口の増加に伴い、立地企業の経済活動や従業員による消費活動が活性化し、地域への経済波及効果が期待される。					
重要業績評価指標 (KPI)	指 標		現状値 (調査時点)		目標値 (達成年度)	
	誘致活動に伴う訪問企業数		4社 (令和2年度)		15社 (令和8年度)	
スケジュール	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	合計
情報収集・発信	→					
事業費見込額 (千円)	0	0	0	0	0	0
特定財源等	無し					

③ 農作物猿害防止体制の構築

定住自立圏形成協定の規定内容	
取組の名称	農作物猿害防止体制の構築
取組の内容	農作物猿害の軽減に向けて、甲及び乙地域における猿の生態を調査し、及び検証するとともに、総合的な調整を図りながら、連携による農作物猿害防止体制の構築に取り組む。
中心市（甲）の役割	猿の生態を調査し、及び検証するとともに、乙等との調整を図りながら、農作物猿害防止体制の構築に向けた取組を中心的に行う。
周辺市町村（乙）の役割	甲と連携して猿の生態を調査し、及び検証するとともに、農作物猿害防止体制の構築に向けた取組を行う。

事業名	農作物猿害防止対策事業					
関係市町村	弘前市、西目屋村					
現状と課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・弘前市及び西目屋村地域における猿の生息分布は拡大しているものと推測され、農作物の猿害についても広範囲にわたって発生し、その被害は深刻化している状況にある。</li> <li>・猿の駆除や追い払い等について、現在、弘前市と西目屋村が各々実施している状況にあり、より効果を上げるため、連携による広域的な取組を行う必要がある。</li> </ul>					
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・猿の行動域調査を行っている団体等へ弘前市及び西目屋村地域の調査を依頼するなど、猿の生息数、群れの数、行動域等の管理をする。</li> <li>・弘前市と西目屋村が隣接する各地域に巡視員を配置して、情報交換や捕獲用わなの共同設置など、連携を図る。</li> <li>・行動域データをもとに群れの管理を行うため、捕獲による間引きや、先回りによる追い払い等を実施する。</li> </ul>					
効果	弘前市及び西目屋村地域内の広範囲に生息する猿の行動域等を把握することにより、猿の動きを事前に察知し、出没箇所を特定するなど、効果的な駆除や追い払いが可能となり、農作物の猿害防止が図られる。					
重要業績評価指標（KPI）	指 標		現状値（調査時点）		目標値（達成年度）	
	ニホンザルの捕獲数		112 頭（令和2年度）		150 頭（令和8年度）	
スケジュール	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	合 計
猿の行動調査	→					
巡視員の連携	→					
捕獲や追い払いによる群れの管理	→					
事業費見込額（千円）	10,655	9,755	9,755	9,755	9,755	49,675
特定財源等	無し					

(5) 観光振興

政策分野における基本目標	指標	現状値 (調査時点)	目標値 (達成年度)
	弘前圏域定住自立圏観光消費額 (推計値)	34,397 百万円 (令和元年度)	37,960 百万円 (令和7年度)

定住自立圏形成協定の規定内容	
取組の名称	広域観光商品の充実
取組の内容	圏域への誘客につながる広域観光商品の充実を図るため、圏域に求められる観光ニーズを調査し、及び検証するとともに、観光商品を開発する首都圏の旅行代理店等へ効果的な情報発信を行う。
中心市 (甲) の役割	広域観光商品のニーズを調査し、及び検証し、首都圏の旅行代理店等への情報発信を行うとともに、取組に必要な経費を負担する。
周辺市町村 (乙) の役割	甲が行う取組を連携して行うとともに、取組に必要な経費を負担する。

事業名	広域観光商品化情報発信事業					
関係市町村	弘前市、黒石市、平川市、藤崎町、板柳町、大鰐町、田舎館村、西目屋村					
現状と課題	旅行形態は、交通手段の発達や、サービスの向上などにより、国内外を問わず、団体、グループ、個人などの多様なニーズに合わせた情報発信が必要となっている。当該地域では、広域観光圏の形成や周遊促進など、魅力度の向上をはかり、発地側で効果的な情報発信をすることが重要となっている。					
事業内容	国内旅行者はもとより、外国人旅行者も意識した観光コンテンツの磨き上げ、掘り起こしにより広域観光商品の充実を図る。 首都圏を中心とした旅行代理店や交通事業者に対する広域観光商品の情報発信のほか、WEB サイトや SNS 等も活用し観光コンテンツや広域観光商品の情報発信を実施する。 各種イベント等において、圏域観光情報の発信を実施する。 これらの取組みを津軽圏域 DMO である (一社) Clan PEONY 津軽と連携して実施する。					
効果	津軽エリアへの広域観光商品が充実することで、誘客が促進され、同時に地域経済も活性化される。					
重要業績評価指標 (KPI)	指標		現状値 (調査時点)		目標値 (達成年度)	
	弘前圏域定住自立圏観光入込客数		7,233 千人 (令和元年度)		7,744 千人 (令和7年度)	
スケジュール	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	合計
広域観光商品の検証と充実					→	
情報発信					→	
事業費見込額 (千円)	15,171	15,171	15,171	15,171	15,171	75,855
特定財源等	無し					

(6) 地域防災

政策分野における基本目標	指 標	現状値 (調査時点)	目標値 (達成年度)
	防災に関する地域連携の強化	連携強化体制は整いつつある (令和2年度)	連携強化による防災力向上 (令和8年度)

① 広域備蓄体制の整備

定住自立圏形成協定の規定内容	
取組の名称	広域備蓄体制の整備
取組の内容	大規模・広域的な災害の発生時に被災住民に対して的確に対応するため、青森県と連携しながら、燃料、毛布、飲料水等の物資を備蓄する体制を整備する。
中心市(甲)の役割	備蓄体制の在り方等について国及び青森県と調整を図りながら、その体制整備に関する施策を実施するとともに、整備に必要な経費を負担する。
周辺市町村(乙)の役割	甲と連携して備蓄体制の整備に関する施策を実施するとともに、整備に必要な経費を負担する。

事業名	災害時に向けた備蓄体制の整備・強化					
関係市町村	弘前市、黒石市、平川市、藤崎町、板柳町、大鰐町、田舎館村、西目屋村					
現状と課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・災害時においては、近隣を含む広域の自治体による応援が不可欠であり、本市を含む弘前圏域定住自立圏構成市町村では、「弘前圏域8市町村国土強靱化地域計画(令和3年3月)」の合同策定を契機として、事前防災を柱に意見交換や情報共有を行うなど連携強化が図られている。</li> <li>・また、県においては「青森県備蓄計画(平成30年3月)」を策定するとともに、「災害時における青森県市町村相互応援に関する協定(平成30年12月)」を締結し、県内全域での支援体制の整備に取り組んでいる。</li> <li>・今後より一層、連携・協力し、防災力を向上させるためには、県の計画等を踏まえた上で、圏域自治体が不足する部分を明確にし、各自治体の主体的な備蓄体制の推進や関係機関からの受援体制の構築を図ることが課題である。</li> </ul>					
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・備蓄整備については、備蓄計画の未策定・見直し自治体への支援を目的に圏域自治体全体で協議を行い、整備体制の底上げを図るほか、計画に沿った備蓄を推進し、防災力の向上を図る。</li> <li>・「青森県備蓄計画」及び「災害時における青森県市町村相互応援に関する協定」等の内容及び手順等について確認・情報共有を行うとともに、災害時の受援体制・連携体制の強化を図る。</li> </ul>					
効 果	災害に向けた備蓄体制の強化、災害時の対応力強化が図られ、圏域の防災力上につながる。					
重要業績評価指標(KPI)	指 標	現状値 (調査時点)		目標値 (達成年度)		
	備蓄計画(各自治体)の策定	一部策定済み (令和2年度)		策定完了 (令和8年度)		
	備蓄物資の整備	一部整備済み (令和2年度)		整備完了 (令和8年度)		
スケジュール	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	合 計
備蓄体制情報共有	→					
備蓄計画作成支援	→					
備蓄計画作成・改定	→					
備蓄品整備	→					
事業費見込額(千円)	4,687	4,687	4,687	4,687	4,687	23,435
特定財源等	無し					

② 合同防災訓練等の実施

定住自立圏形成協定の規定内容	
取組の名称	合同防災訓練等の実施
取組の内容	大規模・広域的な災害の発生時に、自治体及び関係機関が連携した対応ができるようにするため、組織間連携の確認と向上を目指した合同防災訓練を実施する。
中心市（甲）の役割	(i) 合同防災訓練の実施方法、訓練項目等について、提案し、及び検討するとともに、防災関係機関との調整を行う。 (ii) 合同防災訓練の実施について中心的に取り組むとともに、必要な経費を負担する。
周辺市町村（乙）の役割	(i) 合同防災訓練の実施方法、訓練項目等について、提案し、及び検討する。 (ii) 甲と連携して合同防災訓練を実施するとともに、必要な経費を負担する。

事業名	防災訓練の内容強化					
関係市町村	弘前市、黒石市、平川市、藤崎町、板柳町、大鰐町、田舎館村、西目屋村					
現状と課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大規模、広域的な災害への対応は弘前圏域定住自立圏構成市町村間の連携・協力が不可欠であり、各自治体の災害対応力向上のための訓練はもとより、圏域全体としての災害対応力の向上を図るための訓練等の検討・実施が必要である。</li> <li>・これまでも弘前市の総合防災訓練に他の圏域自治体職員が参加するなど、圏域内の防災力向上に努めてきており、今後より一層災害対応における実動面の連携を強化するためには、各自治体の意向を踏まえながら、訓練や研修の内容等の工夫を図ることが課題である。</li> </ul>					
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防災訓練及び研修会の内容及び実施方法等の検討</li> <li>・防災訓練及び研修会の実施</li> </ul>					
効果	情報交換・検討を通して防災訓練及び研修会の内容等が充実することにより、地域の防災力の向上が図られる。					
重要業績評価指標 (KPI)	指 標		現状値 (調査時点)		目標値 (達成年度)	
	防災訓練及び研修会の内容等検討		0 回 (令和 2 年度)		1 回 (令和 8 年度)	
スケジュール	令和 4 年度	令和 5 年度	令和 6 年度	令和 7 年度	令和 8 年度	合 計
防災訓練検討					→	
研修会検討					→	
事業費見込額 (千円)	339	339	339	339	339	1,695
特定財源等	無し					

(7) 環境

政策分野における基本目標	指標	現状値 (調査時点)	目標値 (達成年度)
	リサイクル率	10.5% (令和元年度)	14% (令和8年度)

① し尿処理の広域化

定住自立圏形成協定の規定内容	
取組の名称	し尿処理の広域化
取組の内容	汚水処理等を効率的に行うため、圏域のし尿等を一括して処理する。
中心市 (甲) の役割	圏域のし尿等を一括処理することができる受入施設の整備及び管理・運営に取り組むとともに、必要な経費を負担する。
周辺市町村 (乙) の役割	甲と連携して施設の整備及び管理・運営に関連する取組を行うとともに、必要な経費を負担する。

事業名	し尿・浄化槽汚泥等共同処理事業					
関係市町村	弘前市、黒石市、平川市、藤崎町、板柳町、大鰐町、田舎館村、西目屋村					
現状と課題	し尿及び浄化槽・農業集落排水汚泥は、下水道の普及や人口減少により減少していくものと思われるが、今後も一定量の発生が見込まれる。これまで弘前地区環境整備事務組合、黒石地区清掃施設組合がそれぞれ処理を行ってきたが、両組合の処理施設の老朽化や処理能力の低下に伴う更新時期に合わせ、MICS事業 (汚水処理施設共同整備事業) として、県の岩木川浄化センター内に「し尿等希釈投入施設 (名称：津軽広域クリーンセンター)」を建設し、平成27年10月から圏域内のし尿等を共同処理している。					
事業内容	広域的集約処理による、汚水処理事業の効率化や施設管理・運営等の経費削減に取り組む。					
効果	施設管理・運営等の経費を削減することができる。					
重要業績評価指標 (KPI)	指標		現状値 (調査時点)		目標値 (達成年度)	
	し尿等処理量		44,807,320 kg (令和2年度)		41,928,000 kg (令和8年度)	
スケジュール	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	合計
運転管理						
事業費見込額 (千円)	166,975	166,073	165,177	164,283	163,352	825,860
特定財源等	無し					



② カラス対策の連携

定住自立圏形成協定の規定内容	
取組の名称	カラス対策の連携
取組の内容	カラスによる被害を軽減するため、連携して被害状況、個体数等を調査し、及び検証するとともに、検証結果に基づき、広域的かつ効果的なカラス対策を検証し、及び実施する。
中心市（甲）の役割	カラスによる被害調査及び生態調査を行うとともに、その調査結果に基づいた効果的なカラス対策のための取組を中心的行う。
周辺市町村（乙）の役割	甲と連携してカラスによる被害調査及び生態調査を行うとともに、その調査結果に基づいた効果的なカラス対策のための取組を行う。

事業名	カラス対策連携事業					
関係市町村	弘前市、黒石市					
現状と課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カラスの増加に伴いごみの食い散らかしや道路のふん害など、市域の環境美化に影響が出ている。</li> <li>・カラスによる被害を軽減するため、それぞれの市において様々な対策を実施している。</li> <li>・市域を超えて広範囲に生息するカラスの対策をそれぞれで講じるのは、効果が限定的であるため、両市で合同個体数調査を行い被害や生態を検証し把握するなど、連携した対策が必要不可欠である。</li> </ul>					
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・弘前市カラス対策連絡協議会において被害状況等の情報を共有する。</li> <li>・合同個体数調査を行ったうえで、被害調査、生態調査及び検証を実施する。</li> <li>・ごみ集積所におけるカラスのエサ断ちに関する対策を実施する。特に冬季間の収穫残渣の処理によるエサ断ちについて、広報紙等により圏域での啓発を実施する。</li> <li>・弘前大学農業生命科学部と連携し、カラスにGPSを装着して行動域調査を実施する。</li> <li>・その他調査・検証結果に基づいたカラス対策を実施する。</li> </ul>					
効果	現在実施しているそれぞれの自治体の対策に加え、弘前市と黒石市での連携した対策を実施することにより、効率的かつ効果的なカラス対策が可能となり、住みよい街づくりや観光産業への貢献が期待できる。					
重要業績評価指標 (KPI)	指 標		現状値 (調査時点)		目標値 (達成年度)	
	ごみ集積ボックス設置数		3,760 基 (令和2年度)		4,200 基 (令和8年度)	
	協定締結自治体数		2 自治体 (令和2年度)		4 自治体 (令和8年度)	
スケジュール	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	合 計
情報共有	→					
合同調査・検証	→					
エサ断ち対策	→					
事業費見込額 (千円)	13,735	13,735	13,735	13,735	13,735	68,675
特定財源等	無し					

③使用済小型家電リサイクルの促進

定住自立圏形成協定の規定内容	
取組の名称	使用済小型家電リサイクルの促進
取組の内容	圏域における使用済小型家電の再資源化を住民に啓発するとともに、使用済小型家電を効率的にリサイクルする体制を整備する。
中心市（甲）の役割	使用済小型電子機器等の再資源化の促進に関する法律（平成24年法律第57号）にのっとり、使用済小型家電のリサイクルを効率的に促進するため、調査・研究を行うとともに、必要な経費を負担する。
周辺市町村（乙）の役割	甲と連携して、使用済小型家電のリサイクル促進を図るとともに、必要な経費を負担する。

事業名	使用済小型家電リサイクル事業					
関係市町村	弘前市、黒石市、平川市、藤崎町、板柳町、大鰐町、田舎館村、西目屋村					
現状と課題	<p>一般家庭から排出される使用済の小型家電には、有用な貴金属などが含まれているが、これまでは「燃やせないごみ」や「大型ごみ」として排出され、その多くは埋立処分されている。</p> <p>使用済小型家電のリサイクルを効率的に促進するため、圏域内での新たな回収方法として「使用済小型家電等の宅配便回収についての連携と協力に関する協定」を締結し、平成28年3月から宅配便回収サービスを開始した。</p> <p>プラスチックごみの資源循環について法整備が進むなど、使用済小型家電に限らず、リサイクルを取り巻く環境が大きく変化していく状況にあり、圏域内のリサイクル推進のため、関係市町村が今後取り組むべき課題を共有し、連携・協力しながら検討していく必要がある。</p>					
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・圏域内の廃棄物処理施設でのピックアップ回収を行う。</li> <li>・圏域住民への使用済小型家電の再資源化啓発の方法の検討を行う。</li> <li>・圏域内の公共施設などへ設置された回収ボックスによる拠点回収の効率化に向けた方法の検討を行う。</li> <li>・圏域内での新たな効率的回収方法の検討を行う。</li> <li>・使用済小型家電リサイクルの促進のほか、<b>圏域内のごみ減量化・資源化に向けた取組の情報共有と検討を行う。</b></li> </ul>					
効果	有用な資源が再資源化されるとともに、最終処分場の延命化や処理経費の削減などが図られる。					
重要業績評価指標（KPI）	指 標		現状値（調査時点）		目標値（達成年度）	
	使用済小型家電回収量		52,913kg（令和2年度）		52,000kg（令和8年度）	
スケジュール	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	合 計
ピックアップ回収	→					
啓発方法等検討	→					
事業費見込額（千円）	183	183	183	183	183	915
特定財源等	無し					


(8) 土地利用

政策分野における	指 標	現状値 (調査時点)	目標値 (達成年度)
基本目標	空き家・空き地の利活用数	65件 ※ <sup>4</sup> (令和3年9月)	174件 ※ <sup>5</sup> (令和8年度)

※<sup>4</sup> 平成30年度から令和3年9月までの弘前圏域空き家・空き地バンクの利活用数

※<sup>5</sup> 平成30年度から令和8年度までの延べ利活用数

定住自立圏形成協定の規定内容	
取組の名称	空き家・空き地の利活用の促進
取組の内容	圏域の空き家及び空き地の利活用を促進するため、弘前圏域空き家・空き地バンク協議会(以下「協議会」という。)を設立し、連携してバンクの運用等の事業を行う。
中心市(甲)の役割	協議会の事務局を置き、その事業を中心的に行うとともに、必要な経費を負担する。
周辺市町村(乙)の役割	甲と連携して協議会の事業を行うとともに、必要な経費を負担する。

事業名	空き家・空き地バンク連携事業					
関係市町村	弘前市、黒石市、平川市、藤崎町、板柳町、大鰐町、田舎館村、西目屋村					
現状と課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>全国的に空き家及び空き地が増加し、地域住民の生活環境などに悪影響を及ぼしている。</li> <li>増加する空き家及び空き地への対策は、圏域市町村に共通する課題である。</li> </ul>					
事業内容	不動産団体、金融機関及び関係市町村で組織する「弘前圏域空き家・空き地バンク協議会」を設立し、連携してバンクの運用、相談会の開催等の事業を行う。 協議会の主な事業(各団体の役割) <ul style="list-style-type: none"> <li>不動産団体 ⇒ 物件の調査や物件への案内、売買等の仲介や契約</li> <li>金融機関 ⇒ 借入金相談、金利優遇措置</li> <li>中心市(事務局) ⇒ 広報、物件登録等の受付・内容確認、登録事務、事業の企画</li> <li>周辺市町村 ⇒ 広報、物件登録等の受付・内容確認、事業の企画(中心市と連携)</li> </ul>					
効果	<ul style="list-style-type: none"> <li>関係市町村が連携して広報活動をすることにより、物件の閲覧機会が増加し、空き家及び空き地の利活用が促進される。</li> <li>圏域の空き家、空き地の流動化及び移住、定住の促進が図られる。</li> </ul>					
重要業績評価指標(KPI)	指 標		現状値(調査時点)		目標値(達成年度)	
	空き家・空き地の新規登録数		149件 ※ <sup>6</sup> (令和3年9月)		418件 ※ <sup>7</sup> (令和8年度)	
スケジュール	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	合計
事業実施						
事業費見込額(千円)	2,486	2,486	2,486	2,486	2,486	12,430
特定財源等	無し					

※<sup>6</sup> 平成30年度から令和3年9月までの弘前圏域空き家・空き地バンクの新規登録数

※<sup>7</sup> 平成30年度から令和8年度までの延べ新規登録数

(9) その他

政策分野における	指 標	現状値 (調査時点)	目標値 (達成年度)
基本目標	消費生活相談件数	860 件 (令和 2 年度)	860 件未満 (令和 8 年度)

定住自立圏形成協定の規定内容	
取組の名称	消費生活相談体制の広域的対応
取組の内容	圏域における消費生活相談を広域的に行うことにより、住民サービスの向上を図る。
中心市 (甲) の役割	圏域の消費生活相談窓口を弘前市市民生活センターとし、消費者の安全確保に関する取組を行うとともに、必要な経費を負担する。
周辺市町村 (乙) の役割	甲と連携して消費者の安全確保に関する取組を行うとともに、必要な経費を負担する。

事業名	弘前圏域消費生活相談事業					
関係市町村	弘前市、黒石市、平川市、藤崎町、板柳町、大鰐町、田舎館村、西目屋村					
現状と課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>近年の消費生活相談の内容は、複雑、多様化しており、相談員も専門的な知識を必要とすることが多い。</li> <li>平成 25 年度以前は圏域市町村の中で消費生活センターを設置しているのは弘前市のみで、他市町村の消費生活センター設置は、専門相談員を配置するための財政的・人材的な面で困難な状況にあったことから、圏域における消費生活相談の窓口を弘前市市民生活センターとし、相談業務を行っている。</li> </ul>					
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>弘前市市民生活センターで圏域における消費生活相談の窓口を実施する。</li> <li>消費者の安全確保を図るため、消費生活に関する諸問題を解決できるよう相談を受け、助言を行うとともに、被害を未然に防止するために必要な情報を提供する。</li> <li>そのほか、相談員の研修及び情報収集等の業務を行い、相談窓口の体制を充実させる。</li> </ul>					
効 果	圏域市町村が単独で消費生活センターを設置するよりも経費の負担が軽減され、専門の消費生活相談員が確保される。					
重要業績評価指標 (K P I)	指 標		現状値 (調査時点)		目標値 (達成年度)	
	相談対応不能件数		0 件 (令和 2 年度)		0 件 (令和 8 年度)	
スケジュール	令和 4 年度	令和 5 年度	令和 6 年度	令和 7 年度	令和 8 年度	合 計
相談業務	→					
市町村への周知	→					
事業費見込額 (千円)	8,409	8,409	8,409	8,409	8,409	42,045
特定財源等	青森県消費者行政推進事業費補助金					

## 2 結びつきやネットワークの強化に係る具体的取組

### (1) 地域公共交通

政策分野における	指 標	現状値（調査時点）	目標値（達成年度）
基本目標	圏域公共交通分担率※ <sup>8</sup>	6.8% (平成 22 年度)	8.0% (令和 12 年度)

※<sup>8</sup> 公共交通分担率：鉄道、バスなどの公共交通を利用している割合

定住自立圏形成協定の規定内容	
取組の名称	圏域公共交通ネットワークの再構築及び利用促進
取組の内容	地域公共交通の確保及び利便性向上に向けて、圏域における地域公共交通の実情を調査し、及び検証するとともに、総合的な調整を図りながら、交通事業者と連携して、圏域の公共交通ネットワークの再構築及び利用促進に取り組む。
中心市（甲）の役割	(i) 交通事業者と共同して圏域公共交通計画を策定し、その施策の実施に中心的に取り組むとともに、圏域における公共交通の利用促進活動を実施する。 (ii) 圏域公共交通計画の策定及びその施策の実施並びに利用促進活動に関して、必要な経費を負担する。
周辺市町村（乙）の役割	(i) 交通事業者と共同して圏域公共交通計画を策定し、その施策の実施に取り組むとともに、圏域における公共交通の利用促進活動を実施する。 (ii) 圏域公共交通計画の策定及びその施策の実施に関して、必要な経費を負担する。

事業名	公共交通ネットワークの再構築及び利用促進活動の実施					
関係市町村	弘前市、黒石市、平川市、藤崎町、板柳町、大鰐町、田舎館村、西目屋村					
現状と課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・圏域における公共交通の利用者は減少し続けているため、交通事業者の経常損失は年々増加し、その維持が難しくなっている。</li> <li>・通勤、通学、通院及び買物等の日常生活を営む上で必要不可欠な生活の足として、誰もが利用できる公共交通の維持・確保は重要な課題となっている。</li> <li>・地域の実情に即した持続可能な公共交通ネットワークを構築するためには、圏域全体での計画的な取り組みが必要となっている。</li> </ul>					
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・青森県や圏域市町村が策定した地域の公共交通に関する計画等を踏まえて<b>圏域市町村と交通事業者が連携し、広域的な路線の利用促進を図るとともに維持・再編等の取組を進めていく。</b></li> <li>・各市町村の広報紙やホームページなどの広報媒体を活用した公共交通機関利用の呼びかけや、圏域の<b>市町村職員をはじめとした住民の自発的な公共交通利用を促すためのモビリティ・マネジメント※<sup>9</sup></b>等の取組を実施する。</li> <li>・<b>鉄道路線の維持及び地域の活性化を図るため、弘南鉄道弘南線・大鰐線維持活性化支援計画に基づき、安全輸送に係る支援を行うとともに利用促進に取り組む。</b></li> </ul>					
効 果	普段公共交通を利用しない住民に対し、公共交通を利用するメリットや必要性を幅広くPRすることによって利用を促進し、圏域における公共交通の維持確保に資する。					
重要業績評価指標（KPI）	指 標	現状値（調査時点）		目標値（達成年度）		
	バス利用者数	2,572 千人 (R1. 10～R2. 9)		3,114 千人 (R7. 10～R8. 9)		
	乗合タクシー利用者数	7 千人 (R1. 10～R2. 9)		63 千人 (R7. 10～R8. 9)		
	弘南鉄道利用者数	1,336 千人 (令和 2 年度)		3,118 千人 (令和 8 年度)		
スケジュール	令和 4 年度	令和 5 年度	令和 6 年度	令和 7 年度	令和 8 年度	合 計
利用促進活動等の実施	→					
維持・再編等の取組	→					
事業費見込額（千円）	129,100	140,100	126,000	138,800	87,400	621,400
特定財源等	無し					

※<sup>9</sup> 「過度に自動車に頼る状態」から「公共交通や徒歩などを含めた様々な交通手段を上手に利用する状態」へと変えていく、コミュニケーションを中心とした一連の取り組み。  
主な取り組みとしては、時刻表や路線図の運行状況や運賃などの情報提供、ヒアリングやアンケートなどを通じて公共交通利用を直接働きかけるコミュニケーション施策などがある。

(2) 地域内外の住民との交流・移住促進

政策分野における 基本目標	指 標	現状値 (調査時点)	目標値 (達成年度)
	成婚件数	4 件 (令和2年度)	35 件 (令和4~8年度)
	移住者数	84 人 (令和2年度)	350 人 (令和4~8年度)

①婚活支援の推進

定住自立圏形成協定の規定内容	
取組の名称	婚活支援の推進
取組の内容	圏域全体に婚活支援を展開することで、多様な出会いの場の創出、成婚の促進及び定住人口の増加を図る。
中心市 (甲) の役割	成婚を促進する婚活支援の取組を行うとともに、必要な経費を負担する。
周辺市町村 (乙) の役割	甲と連携して婚活支援の取組を推進するとともに、必要な経費を負担する。

事業名	婚活支援事業					
関係市町村	弘前市、黒石市、平川市、藤崎町、板柳町、大鰐町、田舎館村、西目屋村					
現状と課題	少子化・晩婚化が進行する中、結婚意欲はあるが出会いの機会が少ない独身男女に、出会いの場の提供や情報発信など、地域全体で支援する体制づくりが求められている。					
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ひろさき広域出愛サポートセンター」の運営を通じ、<b>圏域住民を対象とした婚活支援事業の取組を推進する。</b></li> <li>・圏域内における婚活支援事業に係る情報発信を行う。</li> <li>・<b>婚活イベントの開催等、多様な出会いの場の創出に取り組む。</b></li> <li>・その他、圏域全体において取り組むべき婚活支援事業について協議・検討を行う。</li> </ul>					
効 果	圏域全体において婚活事業を展開し、より多様な出会いの場を創出することにより結婚に対する意識が高揚するとともに、婚姻数が増加し、定住人口の増加が期待される。					
重要業績評価指標 (K P I)	指 標		現状値 (調査時点)		目標値 (達成年度)	
	連絡先交換件数		53 件 (令和2年度)		360 件 (令和4~8年度)	
スケジュール	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	合 計
ひろさき出愛サポートセンターの運営等						
事業費見込額 (千円)	6,185	6,185	6,185	6,185	6,185	30,925
特定財源等	無し					

②移住・定住の促進

定住自立圏形成協定の規定内容	
取組の名称	移住・定住の促進
取組の内容	圏域への移住・定住を促進するため、圏域の魅力や生活に関する情報の提供・発信に取り組むとともに移住・定住促進に向けた環境整備を行う。
中心市（甲）の役割	圏域への移住・定住を促進するための取組を行うとともに、必要な経費を負担する。
周辺市町村（乙）の役割	甲と連携して圏域への移住・定住を促進するための取組を行うとともに、必要な経費を負担する。

事業名	弘前圏域移住・交流推進事業					
関係市町村	弘前市、黒石市、平川市、藤崎町、板柳町、大鰐町、田舎館村、西目屋村					
現状と課題	人口減少が進行し、全国の多くの市町村が移住対策に取り組む中で、圏域外からの移住を促進するためには、圏域市町村が連携して、移住者を受け入れる態勢を構築するとともに、圏域の魅力や優位性等を一体となってPRし、移住・定住に繋げていくことが必要である。					
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・移住検討者の移住実現に向けた相談対応や圏域市町村における受入態勢構築をサポートする移住コーディネーターを設置する。</li> <li>・弘前圏域内や首都圏におけるセミナー・イベントの開催、移住・定住に関する情報発信等を行う。</li> <li>・その他圏域全体において取り組むべき移住促進事業について協議・検討を行う。</li> </ul>					
効果	圏域全体での移住者受入態勢が強化され、移住検討者の多様なニーズに対応できる幅広い生活スタイルの提案が可能となり、圏域外からの移住・定住が促進される。					
重要業績評価指標（KPI）	指 標		現状値（調査時点）		目標値（達成年度）	
	移住相談件数		121件（令和2年度）		720件（令和4～8年度）	
スケジュール	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	合 計
弘前圏域移住交流専門員の設置	→		→			
移住・定住を促進する各種取組の実施	→		→			
事業費見込額（千円）	5,037	5,037	5,037	5,037	5,037	25,185
特定財源等	無し					

### 3 圏域マネジメント能力の強化に係る具体的取組

#### (1) 圏域市町村の職員等の交流

政策分野における	指 標	現状値 (調査時点)	目標値 (達成年度)
基本目標	研修実施回数	4回 (令和2年度)	4回 (令和8年度)

定住自立圏形成協定の規定内容	
取組の名称	圏域市町村職員の育成
取組の内容	圏域市町村職員の能力の向上及び連携強化を図るため、合同研修を実施する。
中心市 (甲) の役割	圏域市町村職員が合同で実施することで効果が期待できる研修を企画し、及び実施し、圏域市町村職員の参加の機会を提供する。
周辺市町村 (乙) の役割	必要に応じて職員を合同研修に参加させるとともに、必要な経費を負担する。



事業名	圏域職員合同研修事業					
関係市町村	弘前市、黒石市、平川市、藤崎町、板柳町、大鰐町、田舎館村、西目屋村					
現状と課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>職員研修は、圏域内の各市町村において研修計画を定めて企画、実施し、また、専門の研修機関などへ職員を派遣している。</li> <li>地域分権の進展や多様化する住民ニーズに、的確に対応できる職員の能力の向上や意識改革が重要な課題となっている。</li> </ul>					
事業内容	①圏域市町村職員との合同研修を実施する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>ワンペーパーの資料作成研修、ハラスメント研修、クレーム対応力向上研修など</li> </ul> ②圏域における共通の行政課題や推進事業について、圏域市町村職員がともに調査、研究を行い、提言できる機会を創出する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>圏域職員政策提言事業</li> </ul>					
効果	圏域市町村職員の能力の向上や圏域市町村間における職員の連携強化が期待できる。					
重要業績評価指標 (KPI)	指 標		現状値 (調査時点)		目標値 (達成年度)	
	全受講者人数		118人 (令和2年度)		160人 (令和8年度)	
	構成市町村受講者割合		36.4% (令和2年度)		40% (令和8年度)	
スケジュール	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	合 計
合同研修の実施	→					
圏域職員政策提言事業	→					
事業費見込額 (千円)	469	469	469	469	469	2,345
特定財源等	無し					



(2) 行政事務の効率化

政策分野における	指 標	現状値 (調査時点)	目標値 (達成年度)
基本目標	電算システムのクラウド化	7市町村 (令和3年7月)	8市町村 (令和8年度)

定住自立圏形成協定の規定内容	
取組の名称	電算システムの共同利用
取組の内容	電算システムの共同利用により、コストの削減、利便性、効率化、セキュリティの向上、災害時の業務継続における対応力の強化を図る。
中心市 (甲) の役割	市町村間の調整を図りながら電算システムの共同利用に取り組むとともに、必要な経費を負担する。
周辺市町村 (乙) の役割	甲と連携して電算システムの共同利用に取り組むとともに、必要な経費を負担する。

事業名	電算システム共同利用推進事業					
関係市町村	弘前市、平川市、藤崎町、板柳町、大鰐町、田舎館村、西目屋村					
現状と課題	厳しい財政状況が続く圏域の各自自治体においては、経常的経費で多額な電算システム費用の削減を図ることが大きな課題となっている。					
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>住民記録系業務、税系業務、福祉業務等を対象とした電算システムを共同利用する。</li> <li>次期共同利用システム導入に向け検討を実施する。</li> </ul>					
効 果	災害対策の強化とセキュリティの向上等が図られるとともに、経費を削減することができる。					
重要業績評価指標 (K P I)	指 標		現状値 (調査時点)		目標値 (達成年度)	
	電算システム稼働率※ <sup>10</sup>		99.9% (令和2年度)		99.5%以上 (令和8年度)	
スケジュール	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	合 計
共同利用の実施						
次期共同利用システムの検討						
事業費見込額 (千円)	463,661	463,661	463,661	463,661	463,661	2,318,305
特定財源等	無し					

※<sup>10</sup> 電算システム稼働率とは、全業務のシステム稼働予定時間 (年間) のうちシステム稼働時間 (年間) の割合。システム停止時間があつた場合稼働率が減少する。システム事業者との取り決めにより、電算システム稼働率は99.5%以上とするよう設定している。

## 第V章 共生ビジョンの推進

この共生ビジョンは、定住自立圏構想の推進に向けて、今後5年間の弘前圏域が目指す将来像及びその実現のために必要な具体的取組等を明らかにしたものです。

共生ビジョンの策定後は、具体的取組によるビジョンの着実な推進を図るため、「計画 (Plan)」、「実行 (Do)」、「評価 (Check)」、「改善 (Act)」のマネジメントサイクルに基づき、定期的に具体的取組の進捗状況を把握するとともに、共生ビジョン懇談会を含めて、取組の評価・検証を行い、その結果を反映させていくため、毎年度必要に応じて見直しを行います。

### ■ 共生ビジョンの推進体制図

